

[109]

Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. John Haiman (ed.), *Iconicity in syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

## 0. はじめに

本論文の目的は、自然言語における主観性の問題を解決するための糸口を探ることにある。この問題は複雑で捉え難く、また、文法構造のどこをとっても本質的要素として現れてくるものである。以下ではこの問題に対して、(空間文法 (space grammar) と呼ばれる) 認知文法 (cognitive grammar) の観点から迫っていく。この枠組みは、主観的表現の特殊性をはっきりと照らし出し、一貫した方法で記述するための道具立てとなるものである<sup>1</sup>。

主観性は、観察者と観察対象の非対称性が最も極端な観察事象での、観察者の役割と結びついている。言語表現の場合に関係してくる「観察者」は言語行為の当事者たちである。話し手はある事態を、何らかの仕方で把握・構造化することによって言語コードへと落とし込み、対する聞き手も、話し手の意図を再構成するために同様の手続きを踏まなければならない。このことから、興味深い問題となるのは直示表現を用いる場合だと言えるだろう。そこでは、会話参加者が 2 つの仕方で関与している。すなわち、事態を（何らかの表現を通じて）観察（つまり、概念化）する役割を担うのと同時に、当の事態の一要素としても機能しているのである。以下では、（観察者であり観察対象でもあるという）この二重の役割に折り合いをつけるための様々な手続きが主題的に論じられる。

## 1. 認知文法概説

認知文法では意味とは概念化であると考え。意味構造 (semantic structure) とはまさに、言語的慣習の確立したパターンに沿って構造化された概念化なのである。そのため、意味記述には思考や概念といった対象の内部構造にかんする本格的な仮説が不可欠である。[110] 意味を客観的現実から直接に導くことはできない。意味とは世界における状況を心のなかで様々な把握し構造化する手続きなのである。さらに、把握された状況は同じでも、それを表す表現は様々であり、その一つ一つが異なる捉え方 (image) と結びついている。そのような表現群は、表している対象が（真理条件まで含めて）等しいにも関わらず意味が異なるということである<sup>2</sup>。

捉え方 (image) という用語の理解には注意が必要である。(意味構造において重要な役割

---

<sup>1</sup> 本論文は様々な機会に発表した内容が元になっている。有益なコメントをくださった皆さん、なかでも Dwight Bolinger、John Haiman、Elizabeth Traugott に感謝したい。認知文法の全体像を詳しく知りたい場合には、Langacker (1982, 1983) を参照されたい。

<sup>2</sup> この点にかんする議論としては、Lakoff (1982)、Tuggy (1980)、Casad and Langacker (1982)、および、Leonard Talmy の一連の研究 (1975, 1976 など) を参照されたい。

を担っているとはいえ）視覚イメージや感覚イメージそれ自体ではなく、状況を言語化する際の概念化および構造化の方法として位置づけられる。表現が持つ捉え方には次のような事柄が含まれる。（以下で述べる）描写の範囲、事態を特徴づける指定の具体性、（おそらくは明示的に言及されることによって強化される）状況を構成する各部分の際立ち具合、事態に読み込まれる図と地の配置、事態を眺める地点として想定される視座、事態を捉える際に背後で働く想定や指示対象の候補などである。

(1) a. The cat chased the rat. [その猫がそのネズミを追いかけた。]

b. The rodent was chased. [その齧歯類が追いかけられた。]

たとえばこれらの文は（主語の選択に現れているように）図と地の配置において対照的であり、さらにまた、一方の参与者を特徴づける際の（rat と rodent という）具体性や、（明示的に言及されるかどうかという）もう一方が持つ際立ちの点でもはっきり異なっている。

言語表現の意味はいくつかのドメイン (domain) との関係で特徴づけられる。ドメインの中には認知的に還元不可能なものもある。たとえば、時間経験、二次元・三次元空間の概念、（色空間、音程の区別など）様々な感覚と結びついたドメイン、感情ドメインなどである。とはいえ（本論文で扱うものも含め）大部分の表現はより複雑な認知構造との関係で描写する必要があるものである。

言語表現の意味はベース (base) にプロファイル (profile) が課されることから生じると考えられる。ベース（つまり、描写の範囲）は表現が持つ特徴づけに直接関与するドメイン群に位置づけられ、当の表現が使われる際には必ず喚起されることになる。表現のプロファイルはベースの部分構造である。具体的には、表現が指示する (designate) 部分構造であり、ベースにおいて最も高い際立ちを持つ。<sup>[111]</sup> たとえば腕の概念は、elbow や hand といった表現のベースにおいて最も重要なドメインを構成し、それぞれの表現はその部分構造をプロファイルしている。さらに今度は手の概念が finger、palm、thumb といった概念のベースとして機能する。より抽象的な例として、名詞 Tuesday を検討しよう。この表現のドメインは時間そのものではなく、1 週間を構成する 7 日のサイクルという概念であり、その枠に基づいて時間領域を表している。つまり、Tuesday は把握されたサイクルにおける 7 日中の 1 日を指示するということである。

意味構造はプロファイルの性質によって分類できる。最も根本的な区別は認知文法においてモノ (thing) と関係 (relation) と呼ばれる対象の間に引かれる。大まかに言えば、モノとは任意のドメインにおいて境界づけられた領域であり、名詞というクラスはモノを指示する表現のクラスだと考えられる。たとえば、名詞 red は色空間において画定された領域を、octave は音階において画定された領域を、Tuesday は 1 週間を構成する日々のサイクルにおいて確定された領域（その中の 1 日）を、inning は野球の試合において画定された領域を、hand は腕において確定された領域を、finger は手において確定された領域を、それぞれ指示

する。このようなモノの定義が具体物には全く言及していない点に注意されたい。とはいえ、具体物は、三次元空間において確定された領域として、モノの定義を満たしてはいる。

関係の意味は把握された複数の対象の結びつきをプロファイルする（モノも関係も対象となりうる）。関係における基本的区別は、（形容詞、副詞、前置詞などの）**静的** (stative) 関係と（動詞が表す）**過程** (process) の間に引かれる。静的関係がプロファイルするのは、非時間的に捉えられ、全体として同時にアクセスされる対象間の構成である。過程の方はより複雑であり、以下の2つの点で必然的に時間性を持つ。まず、過程のプロファイルは時間上の各時点に連続して現れる（各関係からなる）状態群である。さらに、それらの状態は一度にアクセス可能な全体として活性化されるのではなく、順番にアクセスされていくため、過程は時間を通じて段階を踏んで展開されていくように捉えられる。ここでは、図1に示した2種類の記法を導入しておけば十分であろう。（図1では外枠に対応する）ベースの中で、プロファイルされた部分構造 (PFL) は太線で表示されている。図1(a)にあるように、丸はモノ概念の略図である。図1(b)は関係の意味であり、2つの対象が配置され、両者を繋ぐ線がその結びつきを表している。[112]

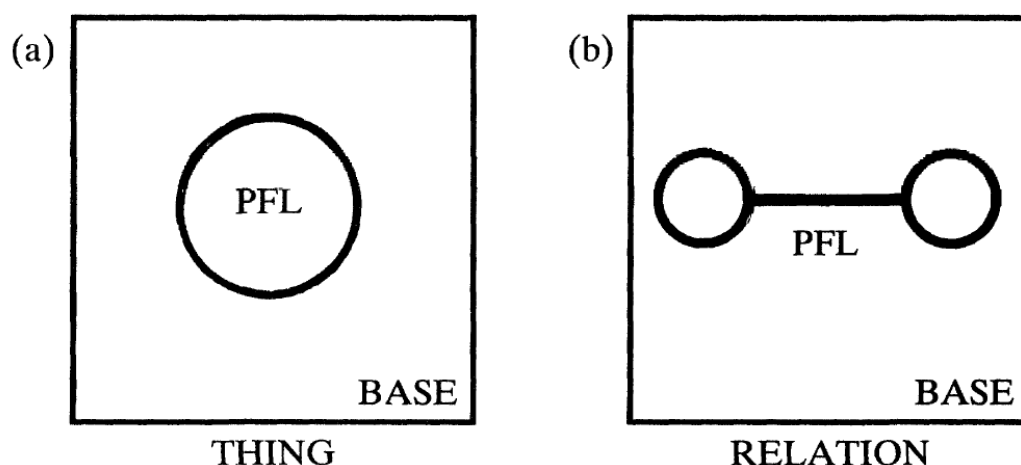


Figure 1

紙幅の都合で、文法構造についてはごく簡単に述べるに留めたい。認知文法では、言語知識の基本単位として認められるのは、意味構造・音韻構造・記号構造という3種のみである。語彙・形態・統語は全て記号構造であり、明確な線引が不可能な仕方で連続している。文法は記号的表現を次々と組み合わせ、より入り組んだ記号構造を作り上げる手続きとして存在する。組み合わせ手続きに共通するパターンは、**スキーマ的** (schematic) 記号構造となる（この構造は具体的な複合表現と抽象度の点で異なるだけである）。このような構造はまた、新規表現を具体事例として位置づけることを通じて認可する働きを持つ。

文法構造は複数の**成分** (component) 表現を統合し**合成** (composite) 表現とする手続きを規定するものである。2つの記号構造の意味および音韻における統合は、**結合価関係** (valence relation) として捉えられる。認知文法の枠組みではすでに、結合価関係についてか

なりの程度洗練された理論が作り上げられているが (cf. Langacker 1981)、ここでの議論に関係するのは、その一部分のみである。特に重要なのは、**一致 (correspondence)** および**プロフィール決定 (profile determinance)** という考え方である。

結合価関係は成分構造間の一致によって成立する。一致は 2 つの成分構造が重なっている点を示す働きを持つ。2 つの成分に含まれる部分構造の間に成立する一致によって、両者が同一の対象として捉えられていることが表されるのである。成分構造が一貫した合成概念へと統合されるためには、このような重なりが必要である。合成構造は 2 つの成分概念を統合し、一致する対象への指定を重ね合わせることで成立する。それでは、合成構造のプロファイルはどうなるのだろうか。[113] 一般に合成構造には、一方の成分構造のプロファイルが引き継がれる (つまり、その成分と同じ対象を指示する)。合成構造へとプロファイルをもたらす成分構造を結合価関係における**プロファイル決定詞 (profile determinant)** と呼ぶ。

(1a) を例に説明する。chased は主要な参加者を 2 つ持つ過程をプロファイルする。ただし、この動詞自体はそれぞれの参加者を、移動能力のあるモノと追跡能力のあるモノというしかたで、あくまでスキーマ的に特徴づけるものである。the cat と the rat という名詞句はいずれも、より詳細に特徴づけられたモノを指示しており、さらに、プロファイルされた対象が話し手・聞き手に了解されていることを示している。2 つの結合価関係がこれらの構成要素を結びつけ、1 つの文という合成構造が成立する。1 つは、chased と the rat を統合するものである。そこでは、chased が指示する過程においてスキーマ的に特徴づけられた参加者 (具体的には追跡されるモノ) と the rat が一致している。この構造においては chased がプロファイル決定詞であるため、合成構造 chased the rat はモノではなく過程を指示することになる。2 つ目の結合価関係は the cat と chased the rat を統合するものである。ここでは、the cat がプロファイルするモノが chased the rat が指示する過程の参加者 (すなわち、スキーマ的にのみ規定されている追跡者) と一致している。今回もまた過程表現がプロファイル決定詞として機能し、合成構造全体、つまりこの文の意味構造は、(話し手・聞き手の双方に明らかである) 具体的な参加者を持ち、発話時よりも前の時点に位置づけられる過程をプロファイルすることになる。

## 2. 直示と認識述語

以下では、**グラウンド (ground)** という用語を発話事象、発話状況、発話の参加者を表すものとして用いる。ここから、グラウンドは多面的であり、それぞれの言語表現を説明する際には、より関わりの濃い部分と薄い部分に分けられると考えられる。グラウンド要素の中では、話し手が中心に位置すると考えられ、グラウンドへの指示は、まずは話し手への指示と解釈できることが多い。

これらを踏まえ、**直示 (deictic)** 表現は**描写の範囲 (scope of predication)** すなわちベースにグラウンド (ないしその一部) を含むものとして規定できる。(2) における名詞 Tuesday を検討しよう。

- (2) a. Tuesday is the second day of the week. [火曜日とは1週間における2日目である。]  
 b. Tuesday was hectic. [火曜日は大変だった。]  
 c. Tuesday is going to be difficult. [火曜日は難しくなりそうだ。] [114]

Tuesday には直示義と非直示義がある。(2a) のような非直示義は単純に、1週間を構成する7日間のサイクルにおける1日を指示している。プロファイルされる部分構造は、図2(a) に示すように、日々の並びにおける他の日との位置関係によってのみ同定される。ここでは、グラウンドを参照する必要がないため、描写の範囲を構成する義務的にアクセスされる概念の中に位置付けられていない。直示義の方は(2b-c) に用いられている。この場合の Tuesday は1週間の内の位置という点では等しい無数の日々の中から、特定の日、つまり時間軸において発話事象と最も近い日を選び出してプロファイルする。図2(b) はこれを表したものである。ここでは、プロファイルされた対象を同定するための参照点として、グラウンド (G) がベースに組み込まれている。このグラウンドはそれ自体がプロファイルされる（つまり、指示される (designated) ）わけではないが、表現の意味構造にとって不可欠な要素となっている<sup>3</sup>。

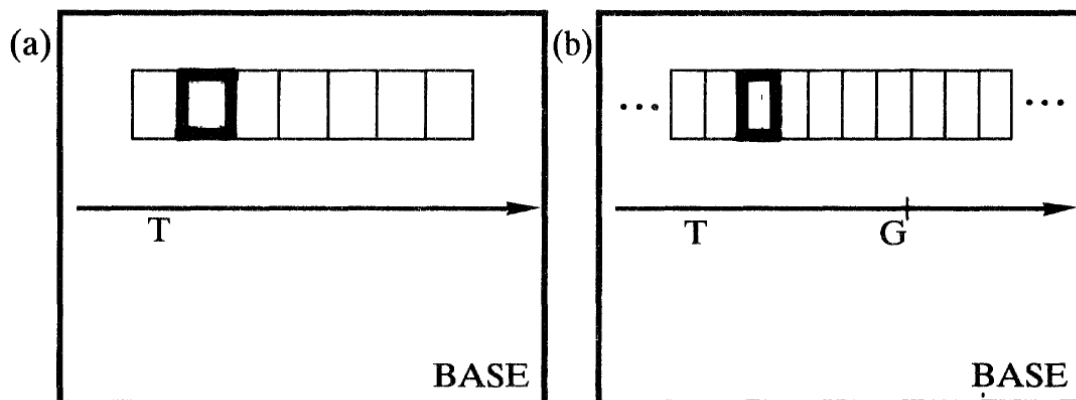


Figure 2

直示表現にはいくつか種類があり、それらをはっきりと区別することが肝要である。根本的な相違の1つは、グラウンド要素自体をプロファイルする表現と、(Tuesdayのように)グラウンドが参照点としてベースに含まれているだけの表現の違いである。前者のグループには (I, you, we といった) 一人称・二人称代名詞と、名詞句解釈の場合の here や now のような表現が含まれる。

<sup>3</sup> もちろん図2(b) は振り返りの捉えられた直示義である（見通しの捉えられた場合も同じ枠組みで表せる）。It happened / will happen Tuesday. [それは火曜日に起こった/起こるだろう。] のように、直示義には関係的なものもある



- (3) a. The best place is (right) here. [最適な場所は(ちょうど)ここだ。]  
b. Now is a good time. [今がチャンスだ。]

here や now は (4) のように関係的プロファイルを持つことの方が多い。

- (4) a. She's here. [彼女はここにいる。]  
b. I see them now. [私は今それを見ている。] [115]

このような発話事象では、発話時や発話地点が主要な関係的参与者の 1 つとして機能するが、グラウンド要素以外の参与者が現れてはいけないわけではない。

グラウンドを参照点としてベースに含む直示的意味と、非直示的意味の両方を持つ表現もある。across はその典型例であり、1 つの用法では 2 者のみを取る非直示関係を指示する。

- (5) An armadillo waddled across the field. [アルマジロが草原をトコトコ歩いていった。]

主要な参与者の他に参照点を含み、より複雑な意味になることもある。(6a-b) のように明示的に指定する場合には、参照点となる要素に制限はない。

- (6) a. There is a mailbox across the street from the drugstore. [薬屋の向かいにポストがある。]  
b. There is a mailbox across the street from here. [ここから反対側にポストがある。]  
c. There is a mailbox across the street. [通りのあちらがわにポストがある。]

across が明確に直示的になるのは (6c) の場合である。英語の慣習では発話事象が生じる地点を、事前の言及なしに、この種の表現の参照点として解釈することができる。動詞 come と go は、よりはっきりと直示的であり、参照点としてグラウンドを優先的に喚起する。

特に come は、話し手と同様の仕方で移動を観察できる有情者である場合には、グラウンド外の要素であっても移動の着点として捉えられる点で注目に値する。これはつまり、この種の表現は話し手が着点に共感し、潜在的ないし代理的なグラウンド要素と見なす場合に最も自然になるということである。主節主語への参照点の移動は (7a) のような文では極めて頻繁に生じ、それによって主語と話し手のいずれが移動を観察する着点として機能するかが曖昧になる。

- (7) a. Rachel told the plumber to come immediately.  
[レイチェルは配管工にすぐ来るように言った。]  
b. I will come to Chicago tomorrow. [私は明日、シカゴに到着する。]  
c. She came to the window. [彼女は窓のところに来た。]

d. She went to the window. [彼女は窓のところに行った。]

(7b) のように移動するのが話し手である場合には、2 番手の会話参加者である聞き手がデフォルトの参照点となる。たとえば (7b) では、(場合によっては他の人物が着点となっていると考えることも可能であるとはいえ) 聞き手が現在 (か明日) シカゴにいると理解するのが普通である。また (7c) では主語を迎える何者かが窓辺に立っていると考えられるのに対し、come ではなく go を用いた (7d) は、女性が窓辺に向かったのはただ窓を開けたり、景色を眺めたりするためだということになるだろう<sup>4</sup>。[116]

直示表現の中には、特別な性質を持つ文法的に重要な類が含まれている。それらは他の対象にかんする話し手の知識およびその位置づけに関わることから**認識表現** (epistemic predication) と呼ばれる。過程の場合には、その時の現実との関係が認識表現によって標示される。英語の時制および法助動詞がその例である。モノの場合に認識表現が表すのは、話し手 (と聞き手) が、談話が開く世界において実際に指示されている対象を、ありうる指示対象の中から選び出すことに成功している度合いである。たとえば、(不) 定標識や一部の数量詞が該当する。このような簡単な説明だけから理解することは難しいかもしれないが、名詞と動詞の認識表現は、モノと過程がもともと有している違いに目をつむれば、多くの点で共通していると考えられる<sup>5</sup>。ここでの用語法で「認識的」であると認められる要素は、小さく閉じた類を形成し、名詞句や定型節動詞にはその内のいずれかが (ほぼ) 必ず見られる。実際、単純な名詞や動詞から名詞句や定型節を区別する基準は、認識表現の存在だと考えられるのである。要するに、名詞句とは認識表現によってグラウンドと関係づけられたモノをプロファイルする表現であり、定型節とは同様の仕方でグラウンドとの関係が示された過程をプロファイルする表現だということである。ここから、名詞句は認識的にグラウンドされたモノを、定型説は認識的にグラウンドされた過程を指示すると言うことができる<sup>6</sup>。

---

<sup>4</sup> グラウンド外の要素が着点となるこれらの例はどれも、話し手が参照点へと心的に移動しているのであり、実際には直示的性質が維持されていると考えることができるかもしれない。おそらくこれは誤りではないが、そのような移動の内実を詰めて考える必要があるだろう。ここでは、以下で検討する**転移** (displacement) の中心的・典型的事例とは異なるとだけ述べておきたい。

<sup>5</sup> たとえば、ある類の全て (all) の成員が何らかの性質を共有している場合、1 つの成員を無作為に選べば、必ず (must) その性質を有していることになる。大部分 (most) に当てはまるのであれば、無作為抽出はその性質を有する成員を選ぶだろうし (should)、一部のみ (some) であれば、無作為抽出はそのような成員を選ぶかもしれない (may) ことになるだろう。

<sup>6</sup> (固有名詞や人称代名詞のような) いくつかの表現は、認識表現を意味構造の一部とすることでこの要件を満たしている。つまり、個別の認識表現を用いることなしに認識的にグラ

では、現実や同定に関わる他の表現から、認識表現を区別するものは何なのだろうか。文法化や形式語と機能語の対立を持ち出すことも的外れとはいえないが、そうしてみたところで明らかになることは少ない。ここで検討しているのは有意味な単位なのであり、語彙的要素と文法的要素の間にはっきりとした線が引けるという考えは何であれ受け入れがたい。そのような考えを採用した場合、all、most、some のような数量詞と、many、few、seven のような数量詞には実質的な違いがあると主張することは困難である。しかし、認識的要素であるのは前者のみなのである。認識表現の定義的特徴は一種の**完全な主観性** (radical subjectivity) だと後ほど主張することになるが、当面はこのような特徴が反映した様々な性質を見ていくのが良いだろう。

はじめに検討する性質は、節の述語位置には現れないというものである。<sup>[117]</sup> この点が最も鮮やかに示されるのは、(8a) のような認識的だと考えられる**相対** (relative) 数量詞と、(8b) のように認識的だとは考えられない**絶対** (absolute) 数量詞の対比である。後者のみが節述語として用いることができる<sup>7</sup>。

(8) a. \*The people who agree with me are all/most/some.

[私に賛同した人は全て／大部分／いくらかだ。]

b. The people who agree with me are seven/many/few.

[私に賛同した人は7人だ／多い／少ない。]

名詞にかんする認識表現の代表事例である指示詞は、(グラウンドとの距離や、話し手・聞き手に同定されているかどうかを表す) 関係的要素のように見えるかもしれないが、節の述語位置に自由に現れることができない。

(9) a. ?The culprits are those. [犯人はあれらだ。]

b. The problem is this. [問題はこれだ。]

(9b) のように指示詞が述語位置に現れることもあるが、それは名詞述語として捉えられた場合に限られる。つまり、ここでは距離や同定といった関係を示す基本的意味に忠実に用いられているのではなく、2つの名詞句の指示対象が同一であることを述べる派生用法になっているのである。

動詞の方の認識表現に目を向けると、非常に似通ったことが起こっていることが分かる。(10a) にあるように、様相表現は一般に節述語として振る舞うことができるが、法助動詞は

---

ウンドされているということである。

<sup>7</sup> 概念的には、相対数量詞がより大きな指示母体における量を規定するのに対し、絶対数量詞はそうではないという違いがある (cf. Langacker 1982)。



いま問題にしている意味での認識表現であり、節述語になることができない<sup>8</sup>。

(10) a. That we will finish on time is possible/likely/certain.

[私たちが時間通りに仕事を終えることは可能だ／期待できる／たしかだ。]

b. \*That we will finish on time may/should/must.

[私たちが時間通りに仕事を終えることはだろう／ちがいない／はずだ。]

動詞と共起する認識表現としては他に、屈折によって現在や過去を表す時制がある<sup>9</sup>。(be の補語は完全な語である必要があるが) 時制はそもそも屈折接辞であるため、省略形以外では節述語にならないことを直接確かめることはできないが、(11a) の不自然さはこの点に目を瞑ったとしても明らかだと言って良いだろう。

(11) a. \*Their destruction of the village is/was -ed. [彼らがその村を破壊したのは／た。]

b. Their destruction of the village is in the past.

[彼らがその村を破壊したのは過去のことだ。]

c. Their destruction of the village was before the present.

[彼らがその村を破壊したのは現在より前のことだ。]

(11b-c) から明らかなように、事象のグラウンドに対する時間的位置関係を指定する要素が認識表現でない場合は、問題なく節述語として現れることができる。[118]

認識表現の特徴としてまずは、他の関係表現であれば意味がほとんど同じであるように思われるものでも節述語として機能しうるのに対し、そのような位置に現れることができないことが挙げられた。2つ目の特徴は義務的な直示性である。認識表現の参照点は必ずグラウンドとなる必要があり、(across などの場所表現のように) グラウンドでありうるだけの場合はもちろん、(come や go のように) グラウンドが優先される場合ですら許容されない<sup>10</sup>。この点を確認するために、(7a) に挙げた Rachel told the plumber to come immediately. を

---

<sup>8</sup> We may や They should といった表現は、一種の省略であり (10a) と直接対応するものではない (これは節が主語になっていないことから分かる)。定型節動詞の代用形としての用法については後ほど分析を提示する。

<sup>9</sup> Langacker (1978) は、英語のいわゆる「過去時制」形態素はより正確には、グラウンドからの乖離という抽象的意味の標示として位置づけられ、過去時制となるのはあくまで他の要因との関わりの結果だと主張している。時制を抽象的「距離」を含む概念として捉えることで、指示詞との近さが見て取りやすくなる。

<sup>10</sup> 相対数量詞や法助動詞がどのような意味でグラウンドを参照点として組み込んでいるかを説明するのは簡単ではないため (cf. 注 5)、以下ではこの点が見て取りやすい時制と指示

(12) と比較しよう。

(12) Rachel said that this piano needed tuning.

〔レイチェルはこのピアノは調律が必要だと言った。〕

(7a) では主節主語を *come* の参照点として解釈することが容易であるのに対し、(12) に見られる認識表現では、グラウンド要素のみが参照点となっている。ここでの *this* は、従属節全体がレイチェルの発言内容を伝えるものとなっているにも関わらず、レイチェルではなく、話し手の近接領域にピアノが存在することを示す要素としてのみ解釈される。同じように過去時制形態素はどちらも、それぞれの過程を (12) を発話する事象から離れた場所（すなわち、過去の現実）に位置づけている。主節が表す「言う」過程も、従属節が表す「必要がある」過程も、発話時から見て過去なのである。特に注意が必要なのは、従属節の時制はレイチェルの発言が生じた時点との関係では決まっていないという点である。もしそうであるなら、従属節は過去時制になりそうだが、しかしその場合には (12) が発話された時点でもまだ調律が必要なままであるという含みが生じることになる<sup>11</sup>。

3つ目の特徴は結合価関係にかんするものである。具体的には、認識表現の参照点として機能するグラウンディング要素を明示することはできないという点を取り上げる。同様の意味を持つ場合でも認識表現でなければ、参照点を名詞句で明示できることからすれば、これは説明を要する特徴だと言えよう。たとえば指示詞の *this* はモノと話し手・聞き手との間に成立する2種類の関係を表している。1つは（とくに話し手との）近接性であり、もう1つは（話し手・聞き手双方による）同定である（こちらの方も抽象的ドメインにおける近接性として捉えられるかもしれない）。*near* や *close* は話し手との距離の点で *this* とおおよそ等しい意味を表す非認識表現であり、*known* や *identified* は同定の点で等しい非認識表現である。これらは全て静的関係であり、目的語名詞や *to* を用いた斜格表現との結合価関係によって、参照点（すなわち、ランドマーク (landmark)）を精緻化することができる。

(13) a. a town near us [私たちの近くの町]

---

詞に議論を限定することにする。

<sup>11</sup> Langacker (1978) は、英語では「時制の一致」規則のようなものを立てる必要はないと主張している。

Elizabeth Traugott の指摘によると、関係表現によるグラウンディングは、文体によってさらに複雑になることがある。これは特に「自由間接話法」に顕著である（たとえば次のような例が考えられる。She was afraid. Why was this happening to her? [彼女は怖くなった。どうして私にこんなことが起こるのだろう。] ここでは *this* の意味が登場人物と相対的に決まるのに対し、時制と人称は話し手／書き手と想定的に決まっている。）本論文の枠組みを文体にかんする問題に当てはめていけば、多くのことが明らかになるように思われる。

b. a town close to us [私たちの近くの町]

c. a person known/identified to us [私たちが知っている／分かっている人] [119]

それに対し、this の参照点を同様の仕方で詳細化することはできない。(14b-c) は (14a) の参照点を上手く精緻化したものとはとても言い難い。

(14) a. this town [この町]

b. \*this (to) me town [この私（に対して）町]

c. \* (a/the) town this (to) us [私たち（に対して）この町]

this が意味する空間的近接性という関係自体を別の場所表現で重ねて表すことは可能だが、このことは、ここでの議論とは関係がない。

(15) a. this town near us [私たちの近くのこの町]

b. this here town [この近くの町]

最後に、認識表現は認知文法で考えてきた結合価関係の理論にとって問題であるように思われるかもしれないので、その点を検討しておきたい。この理論では、認識表現が名詞的表現や動詞的表現と結びつく結合価関係において、プロファイル決定詞として機能すると見なすことになる。たとえば、相対数量詞が不可算名詞と結びついた *most horses* や *some sand* といった表現を例に考えてみよう。すでに述べたように、相対数量詞は指示母体全体のうち、何らかの割合を占めるまとまりとして対象を表す。結合価関係によって相対数量詞と結びつく名詞は、このまとまりと一致し、その内実を指定する働きを持つ。では、合成表現のプロファイルはどうなるだろうか。具体的には、*most horses* のような表現は何を指示しているのだろうか。指示母体全体を指示しているのはいないことは明らかであろう。指示対象はむしろ、数量詞の意味によって切り取られたまとまりである。たとえば、走るのが好きであるという性質は (16a) であれば *horses* が指示する全対象に帰されるが、(16b) の場合にはその大部分であるに留まる。

(16) a. *Horses like to run.* [馬は走るのが好きだ。]

b. *Most horses like to run.* [たいていの馬は走るのが好きだ。]

認知文法においては指示とはすなわちプロファイルであるため、*most horses* という合成構造は名詞の方ではなく数量詞の方からプロファイルを継承していると考えざるをえない。ということは定義上、この結合価関係のプロファイル決定詞は数量詞だということである。

本論文では、認識表現は結合価関係に参与する場合に、一貫してプロファイル決定詞とし

て機能すると考える道を探ってみたい。しかしながら、このような考えの前には矛盾が立ち  
はだかっているようにも思われる。[120] 認識表現は静的関係を表すと思われるかもしれな  
い。実際、known、identified、near、before、possible、certain など類似する意味を持つと考え  
られる表現を見てみると、全てこの類にまとめられる。ここから、認識表現を実際に静的関  
係を表すとし、さらに一貫してプロファイル決定詞として機能しているとするのであれば、  
結合価関係による合成構造に対して関係的プロファイルを課していることになるはずであ  
る。そうすると、this man は静的関係を、具体的には発話参加者との近接性や同定関係を表  
していることになる。しかし実際には、この表現は関係的なものではなく名詞的に機能して  
おり、男性とグラウンドとの関係ではなく、男性自身を指示している。また、同じように考  
えると He fainted は非過程的であり、時間的先行性という静的関係を指示していると分析す  
ることになってしまうが、しかしどう見ても、この節は faint が指示する過程をプロファイ  
ルするもの（であり、発話時に対する時間的先行性は副次的であり、プロファイルの外にあ  
る指定）だろう。

つまるところ、認識表現は名詞句や定型節を作り出すと考えられるが、同時に、静的関係  
を指示する要素と見なすのであればプロファイル決定詞として位置づけることができない  
ということである。いずれか一方の考えを棄却ないし修正しなければならない。認知文法と  
いう枠組み全体は妥当なものであるとするならば、必要な調整のための明確な基準が求め  
られることになるだろう。以下では、このような基準が主観性という概念の内に見出される。  
解決の鍵は認識表現を主観性が最大になった表現と見なすことであり、それによって実際  
には静的関係の一種ではないことが明らかになる。この分析は上述の矛盾（もどき）を解消  
するだけでなく、認識表現が持つ特殊な文法的性質に説明を与えることもできるものであ  
る。

### 3. 主観性

主観的 (subjective) と客観的 (objective) という対義語には様々な意味があるが、ここ  
では特定の意味に限定して用いる。これらの用語は知覚における**観察者 (observer)** と**観察対  
象 (observed)** の非対称性との関係で規定できる。まずは、知覚関係は対称的でも反射的  
でもないことを確認したい。対称的でないことは、人がモノを観察する際、モノは人を観察し  
ていない（し、そもそも知覚能力を持たないであろう）ことから分かる。また、反射的で  
ないとはつまり、人が自分自身を観察する際には、他の個体を観察するのと同じ方法で容易  
く詳細に観察できるわけではないということである（一般に人は自身の横顔や、頭の後ろを見  
ることができない）。

このような非対称性の出どころは明らかである。それは、主要な感覚器官が観察者の身体  
の一部となり、外側に向けられているということからもたらされる。[121] 感覚器官の守備  
範囲（たとえば、視野）は限られており、その範囲の中もはっきりと知覚できる範囲と、そ  
うではない範囲に分かれている。仮に感覚器官が何らかの仕方で観察者の身体から離れ、空

中を漂うようなものであったなら、観察者と観察対象の非対称性はかなりの程度まで減じらるだろう。この場合には観察者自身が他の対象と同じく、明瞭に知覚可能な範囲に収まることが可能になる。しかしそれでも、非対称性が完全になくなるわけではない。いずれにせよ、感覚器官そのものは観察領域から締め出されてしまうのである。

まずは、観察者と観察対象の非対称性が最大となる、**最適視点配置** (optimal viewing arrangement) を検討する。この視点配置は図 3 (a) のように表すことができる (S は観察者 (ないし 〈自己 SELF〉) を、O は観察対象 (ないし 〈他者 OTHER〉) を、矢印は知覚の方向を表している)。観察状況の最適性には、次の 3 つの要因が関わっている。1 つ目は S と O が完全に別の対象であることである。つまりここでは、〈自己〉の観察対象は〈他者〉であって、〈自己〉の一部ではない。2 つ目は S の注意が O のみに向けられており、それによって〈自己〉への気付きが完全に消えているか、極めて弱い状態に至っていることである。要するに、S が観察しているのは O であって、O を観察する S ではない。S が〈自己〉を意識すると、観察者と観察対象の区別はぼやけてくる。翻って、両者が完全に分かれているとはつまり、〈自己〉意識が存在しないということである。3 つ目は O が高い際立ちを持ち、最も高い明瞭さを持つ領域に置かれていることである。ここでは O が背景から浮き出しており、ごく細かい部分まで知覚されている。大抵の場合はもちろん、観察者に近ければ近いほど明瞭に捉えられるようになっていく。とはいえ、一定の距離は保つ必要がある。O が S にあまりに近い位置にあると、〈自己〉を隅々まで観察するのができないのと同じく、近すぎてははっきり観察できなくなるのである。

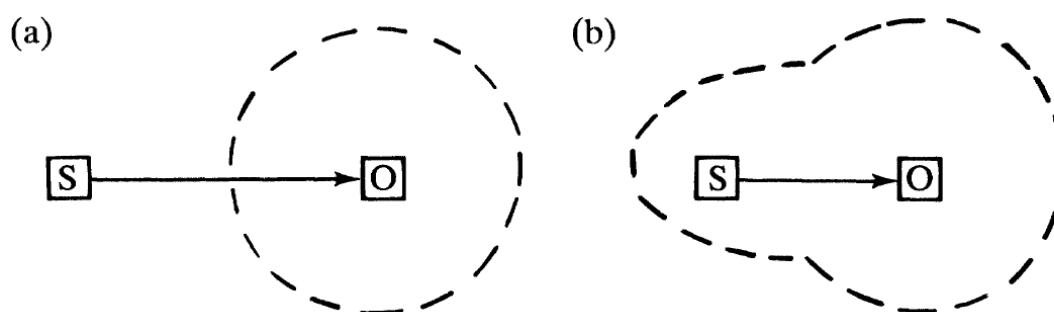


Figure 3

最適視点配置では、S は最大限に**主観的** (subjective) であり、O は最大限に**客観的** (objective) だと考えられる。これはつまり、ある対象が主観的であるのは、観察状況において観察者として非対称的に働いており、〈他者〉を観察する〈自己〉への気付きを完全に失っている場合だということである。[\[122\]](#) それに対し、客観的であるのは観察対象として確立し、背景からも観察者からも明確に区別されて高い際立ちを獲得している場合である。ここから、対象の客観性を最大化するには、通常観察者に近い (が、近すぎることはない) 領域である、明瞭な観察が可能であり、知覚にとって最適な領域に位置づける必要があると言える。図 3 (a) では破線円で示したこの領域は、**客観的事態** (objective scene) と呼ばれる。



客観的事態とはつまり、観察状況において最も注意が向けられる場所である。劇場の比喻を用いて直感的に表現するなら、客観的事態とは**ステージ上 (on-stage)** の領域のことだと言える。そこでは舞台上の役者たちが、観客席に座る観察者から完全に客観的に観察されている。観察者が演劇に完全に夢中になっている場合、それによって〈自己〉への気付きが完全に消失し、観察行為への参与は最大限主観的なものとなる<sup>12</sup>。

図 3 (a) の最適視点配置は、図 3 (b) のように素描できる**自己中心視点配置 (egocentric viewing arrangement)** と対照である。どちらも基本的な知覚経験との関連で規定されるものであり、それぞれに認知的際立ちを持つものと考えられる。両者の違いは客観的事態の範囲にある。図 3 (a) の配置では、この領域が知覚の最適性との関係で決まり、すでに述べたように観察者は領域外に置かれることになる。それに対し、自己中心視点配置は大抵の人々が自身や周囲の対象との関係に対して自然に抱く関心を満たすものである。ここでは、観察において注意が及ぶ範囲が、知覚の最適性によって区切られた範囲を超え、観察者やその周囲をも含むかたちで広がっている。このように客観的事態の範囲が広がると、観察者 S もまたその領域の内に位置づけられるようになる。これはつまり、S はもはや単なる観察者ではなく、一定程度は観察対象でもあるということである。このように、〈自己〉意識は主観と客観の区別をぼやけさせるものだと言えるだろう。

もちろん、ここでの関心は知覚そのものではなく言語表現の意味にある。とはいえ、ここまでに導入してきた概念や枠組みは意味構造の分析に直接結びついていると考えられる。このことを理解するためにまずは、観察者と観察対象の間に成立する**知覚 (perceptual)** 関係は、概念化主体と概念化対象の間に成立する、より一般的な**把握 (construal)** 関係の一事例である点を見て取る必要がある。さらに、把握関係と言語表現との関係が重要になる。そこでは概念化主体は話し手・聞き手であり、概念化は表現の意味であると考えられる。[123]

このような道筋の妥当性は、結局は結果として得られる意味分析の十分さによって支えられるものであるため、ここでは見込みのある方針であると述べるに留めておく。概念化が知覚に根ざしている程度について明確な答えが得られているわけではなく、全ての概念が知覚イメージに還元できると言うこともできない。しかしながら、知覚と一般的な概念化能力に明瞭な切れ目を見出すことは不可能であり、両者は基本的な認知の仕組みが様々に現れたものと見なすのが妥当であるように思われる。自端の利く読者であれば簡単に見て取れるように、抽象的な心的過程を描写する際に用いる用語として、知覚関係の言語表現が非常に多く観測されることも無関係ではない。

**観察者 (observer)、明瞭さ (acuity)、客観的事態 (objective scene)** などの用語は知覚ドメイ

---

<sup>12</sup> 本論文での客観的事態は Lindner (1981, 1982) が英語の動詞・不変化詞構文の分析によって極めて重要であると主張する、**中心的相互作用領域 (region of interactive focus)** と関連するものであろう。

ンとの関連の元で最も適切に感じられるし、理解も容易になるものではあるが、必要に応じてあらゆる種類の概念に適切に当てはめられるように、十分に抽象的な解釈を与えておく必要がある。そこで、観察者 S を概念化主体とすれば、図 3 はいずれも（少なくとも試行錯誤の一環として）概念化主体と概念化対象に成立する把握関係に用いることができそうである。実際、概念化主体と概念化対象との把握関係は非対称的であり、〈自己〉の概念と〈他者〉の概念にははっきりした違いがあるといっていよう。知覚の明瞭さには概念の側に、把握された対象を特徴づける定性や具体性（細かな描写）の程度といった分かりやすい対応物がある。図 3 (a) に示した最適視点配置は〈他者〉を最大の焦点とした概念化と対応付けられる。ここでは、概念化主体 S が自身の概念化過程に気づいていないために主観的な立場に置かれているのである。一方で図 3 (b) に示した自己中心視点配置は、S が〈自己〉を主な関心の対象とし、それにより概念化主体と概念化対象の役割を同時に担っている事例と対応する。

言語表現の意味は概念化であり、それに関与する概念化主体は会話参加者である。話し手は何をどのように言うかを考える際に、何らかの状況を特定のしかたで把握し、構造化する必要があるし、聞き手もまた話し手の意図を再構成するために、同様の手続きを踏まなければならない。もちろん場合によっては話し手が〈自己〉であり、聞き手の方は〈他者〉と見なされることもある。このような最小の把握においては、図 3 の S は話し手だけを表す。[124] とはいえ、コミュニケーションは協調的活動であるため、より大規模な把握が促され、話し手・聞き手がともに集合的〈自己〉として自分たちを位置づけることを通じて、言語表現の意味である共同概念化へと至るものである。その際には S は話し手・聞き手の両方や、（そこから拡張して）グラウンド全体を表すものと見なすことができる。

言語表現は直示と主観性の観点から分類することができる。つまり、概念化主体自身が表現の意味を構成する概念化において果たす役割が（存在するとして）どのようなものかという基準である。さしあたり次の 3 つの可能性を区別できれば十分だろう。1 つは（表現が描写する範囲という意味での）概念化において、概念化主体などのグラウンド要素が全く言及されないというものである。この種の表現はグラウンドが描写の範囲に入っていないため、非直示的であると言える。それだけでなく、概念化主体自身は描写されている事態にいかなる意味でも参与していないため、最大限に主観的になっている。

他の 2 つはグラウンドが描写の範囲に含まれるものである。結果として、表現は直示的となり、概念化主体が一定程度は概念化対象でもあることになる。その中での区別は、概念化された状況におけるグラウンド要素の際立ち具合にある。1 つのパターンではグラウンド要素が描写の範囲には入っているが、さほど目立ってはいないと考えられる。この場合、グラウンド要素は客観的事態の外という意味で、**ステージ外 (offstage)** に置かれ、観察において注意が向けられる対象を位置づけるための参照点としてのみ機能する。もう一つのパターンではグラウンド要素自体が目立つ対象、つまりステージ上の対象となっている。単なる参照点ではなく客観的事態の内に配置され、主たる関心事となる関係においてメインの参与

者となるのである。

すぐ分かるように、この区別は最適視点配置 (図 3 (b)) と自己中心視点配置 (図 3 (b)) の違いに対応している。グラウンド (観察者) が描写の範囲に含まれる場合であっても、客観的事態の外側であり、あまり目立っていないステージ外に留まることがありうる。一方で、客観的事態の範囲が広がり、グラウンドがステージ上に登ることによって高い際立ちを獲得し、自己中心視点配置という独特の見方が成立することもある。客観的事態は観察において集中的に注意が向けられる場として規定されていることからすれば、そこに参与する対象が高い際立ちを得ることも納得できるだろう。

ここまで検討してきたパターンは、それぞれ図 4 のようにまとめられる。プロファイルされる対象はどの図でも (太線の円で示される) モノである場合を想定しており、すでに述べたように (破線で示される) 客観的事態の内側に置かれている。[125] それぞれの類は、客観的事態および (四角が表す) 描写の範囲と、グラウンド (G) との位置関係によって区別できる。図 4 (a) の表現は非直示的である。つまり、グラウンドは全く参照されず、描写の範囲外に置かれている。このタイプの表現としては (elbow、antelope、desk など) ほぼ全ての普通名詞や、Tuesday の非直示義 (cf. 図 2 (a)) が挙げられる。図 4 (b)・(c) はグラウンドが描写の範囲の内側に置かれ、直示表現となっている。図 4 (b) ではグラウンドとプロファイルが別の対象である。ここでは G はあくまで客観的事態の外に留まり、指示対象を同定するための参照点として機能している。これについては既に、Tuesday の直示解釈 (cf. 図 2 (b)) を例に説明した通りである。それに対し図 4 (c) ではグラウンドとプロファイルが一致し、グラウンド要素を指示する表現となっている。つまり、グラウンドが客観的事態の内側に位置づけられるということである (より正確には、自己中心視点配置によって開かれる拡張された客観的事態の内部ということである)。話し手を指示する I がその例となる。

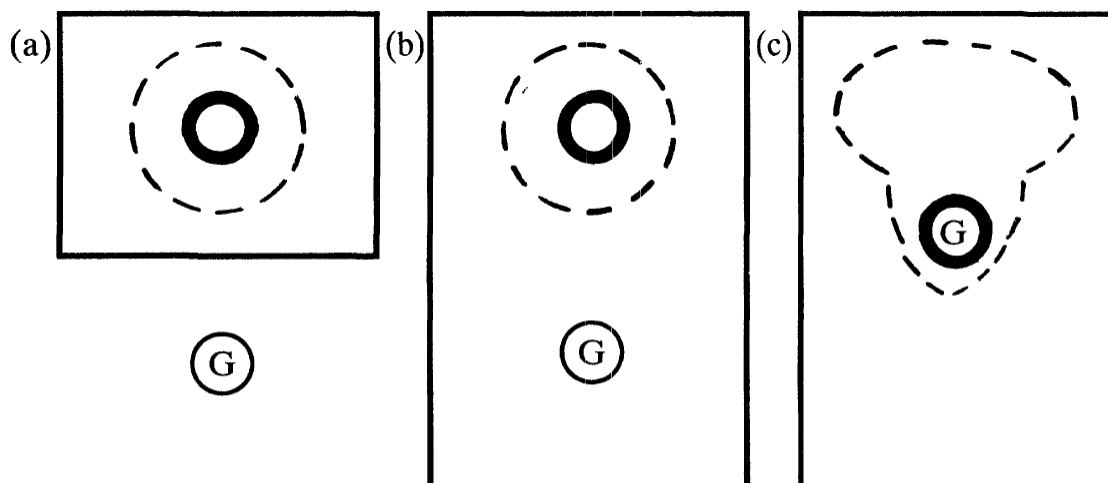


Figure 4

これら 3 つの配置はグラウンドの役割にかんする主観性スケール上の基準値として位置づけることができる。図 4(a) ではグラウンドは最大限主観的である。G は概念化から除外され、どうしても必要な把握関係によってのみ関与している。ここでは役割の違いが完全なかたちで現れている。概念化主体自身は概念化対象ではないのである。G が概念化対象として際立ちを獲得していくと、観察者と観察対象という非対称性は徐々に崩れ、G の主観性が低下していく。[126] 図 4(b) でも G が描写の範囲に収まっているため、主観性はある程度低下しているが、完全に消えてしまうわけではない。G はそれ自体としてはプロファイルを受けない参照点としてステージ外に残されているため、概念化対象としての役割は極めて小さい。それに対し図 4(c) では、G が客観的事態における焦点対象としてプロファイルされており、概念化対象として最大の際立ちが与えられている。ここでは〈自己〉が（主観的对象として）意識から離れるのではなく、ステージ上に置かれ、基本的に客観的对象として捉えられている。観察者と観察対象の非対称性は根本において中和され、G の主観性が最小限に抑えられるのである。

次節ではこの主観性スケールをより詳細に掘り下げることを目指す。具体的には、英語話者がグラウンド要素を様々な客観性のもとに描き出す際に用いる文法的・修辭的手続きを検討していく。これらの手続きはそれぞれに、形式と意味の対応という点で類像的であることが明らかになる。

音声は既に述べた規定からして客観的对象である。発された音声信号は信号源から切り離され、無数の観察者がアクセスできるようになる。さらに話し手は発話事象を形作る音声信号を、主に聞き手による観察を可能にするために「ステージ上」に配置し、それによってコミュニケーションが達成される。聞き手は記号関係を踏まえ、知覚経験に基づいて話し手が意図した概念化を再構成するのである。ここで問題にしているのは、知覚の方で音声が客観化される程度と、対応する概念的対象が示す客観性の程度の間で成立する類像性である。より具体的に言えば、主観性スケールにおけるグラウンド要素の位置は、客観的な音声によって記号化される程度と類像的に対応しているということである。

このことは、(17) に挙げるような文を比べてみればよく分かる。

(17) a. The person uttering this sentence doesn't really know.

[この文を発話している人は本当に分かっていない。]

b. I don't really know. [私は本当に分からない。]

c. Don't really know. [本当に分からない。]

ここでは、the person uttering this sentence、I、そしてゼロという 3 種類の表現によって、話し手が指示されている。これらは客観的な音声内容の量において明らかに異なっており、記述句はほぼ常に代名詞を用いる場合よりも長くなり、客観的内容が最も少ないのはゼロ表



現の場合である<sup>13</sup>。このような音韻ドメインでの違いは、話し手の概念化における客観性の程度と相関していると考えられる。[127] 代名詞は話し手（や、他のグラウンド要素）を記述句よりも主観的に描き出し、ゼロ表現になると主観性がさらに高まる<sup>14</sup>。ここまでに導入してきた道具立てを用いることで、これらの意味の差異を適切に説明することができる。

#### 4. 主観性スケール

言語表現は対象をどの程度主観的に（あるいは客観的に）捉えるかを基準にランク付けしていくことができる。ここでの課題は文法組織における主観性の現れを、より詳細に掘り下げることである。非直示表現を表す図 4(a) では、グラウンドがプロファイルから完全に分離して最大限主観的に捉えられている。それに対し図 4(c) ではグラウンドとプロファイルが一致している（すなわち、この表現はグラウンド要素を指示している）。ここでは主観と客観を区別する基準が失われ、指示されたグラウンド要素の主観性が極限まで切り詰められている。本節ではまず、プロファイルに対する G の位置づけに手を焼く 2 つの構造（ないし、修辞法）を詳しく見ていく。これらの表現の意味は概念化された 2 つの「世界」に成立する一致関係に由来するものであるため、両者がともに描写の範囲に現れることになる（cf. Fauconnier 1979）。具体的には、一方のグラウンド要素がもう一方の要素と一致関係によって同一化しているが、両者は属している世界が異なるために区別されるということである。

このような手続きの 1 つ目は、概念的**転移** (displacement) 能力、すなわち実際の視座とは異なる地点から状況を描写する能力を反映したものである。(17a) がその例であり、この文では話し手が自分自身を *the person uttering this sentence* という仕方で指示し、他人を特徴づける場合と同じく三人称的に描写している。一人称代名詞 I は話し手をはっきり直接に指示するが、*the person uttering this sentence* の場合には、聞き手が提示された記述内容を参照してはじめて、話し手は実は自分自身を（かなり回りくどく）指示しているのだと理解できる。

より印象的な例として、いずれも苛立った母親が子供を叱る状況で用いられるであろう、

---

<sup>13</sup> ここで検討することはできないが、音韻内容の全てが客観的であるわけではないと考えられるかもしれない。音声構造は概念的对象であり、物理的に具現化されて客観的要素となるのはその内の一部のみである。(17c) においてもなお話し手は、(同定機能とでも言えるような) 非客観的内容によって音韻的に記号化されていると考えることも不可能ではなさそうである。

<sup>14</sup> ここには、音韻内容の量が伝達される情報の量と相関するという、単純な経済的動機 (Haiman 1983) 以上の要因が関わっていることに注意されたい。(17) の文はいずれも、主語が話し手であることが既に分かりきっている状況であっても用いることができる。さらに英語の慣習では、I とゼロ表現のいずれによっても、この種の文の話し手を表せる。(17b) と (17c) の意味の違いは、同定や伝達される内容ではなく、話し手が主観的に把握されている程度にあると言える。



(18a) と (18b) の対比が挙げられる。

(18) a. Don't lie to me! [私に嘘を言わないで!]

b. Don't lie to your mother! [お母さんに嘘を言わないで!]

(18b) の母親は「外部」の視座を仮設し、他人を描写する場合のように、自分自身を客観的に描写している。[128] もしかすると、この際の視座は子供のものかもしれない（その場合にはグラウンドの内部には収まっていることになるが、いま問題にしているグラウンド要素、すなわち話し手に対しては外部に位置づけられる）。母親は子どもの視点から自身を描写することで、誤解が生じる危険を可能な限り低めているのである<sup>15</sup>。同様の転移は (19a) の代わりに (19b) を用いる場合にも生じる。

(19) a. Come over here and sit beside me. [こっちに来て、私の隣に座って。]

b. Come over here and sit beside your mother. [こっちに来て、お母さんの隣に座って。]

しかしこちらでは、転移の動機は愛着や一体感といったものであり、母親は子どもの視座へと移動することで愛情を表現しているように思われる。

この状況は図 5(a) のように示すことができる。G は問題のグラウンド要素が実際に存在する位置を表し、G' はこの要素を言語によって描写するために仮設された視座の場を表している。話し手が G から G' へと概念的に転移することにより、プロファイルされる指示対象がグラウンド要素であっても、最適視点配置に持ち込んでステージ外から眺めることができる。この G と G' の「分裂」により、前者は客観的に、後者は主観的に捉えられるようになるが、それでも両者の同一性が忘れ去られるわけではない。図 5(a) の点線はこのような G と G' の一致を表している。両者はほんの少しだけ異なる概念世界に属している。1 つは現実世界であり、G は実際にそこに存在する。もう 1 つは仮想世界であり、観察者の位置が移動しているという点でのみ現実世界と異なっている。

---

<sup>15</sup> 仮設された視座を子どものものだとする見方には、*your mother* ではなく *my mother* が現れるはずだという反論がすぐに思い浮かぶだろう。しかし、この反論は妥当だとは思えない。なぜなら、複合表現の全体が単一の視座との関係で捉えられていなければならないという誤った前提に基づいているからである。これは、*I'll come there tomorrow*. [私は明日そこに来ます。] という表現が自然であることから分かるように、単なる事実誤認であろう。

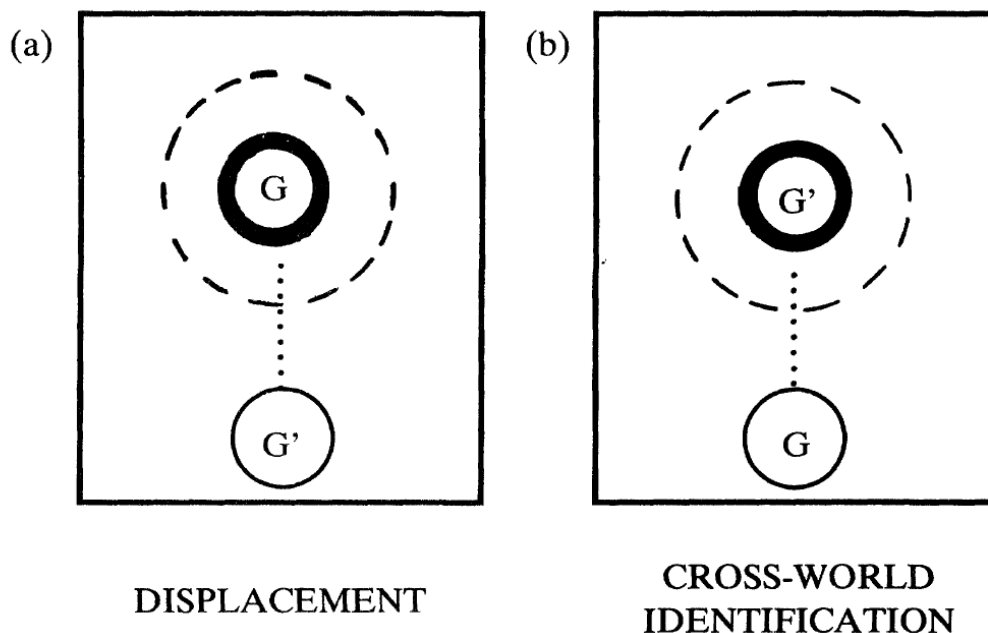


Figure 5

[129] 2 回目の手続きは、**貫世界同一性** (cross-world identification) とでも呼べるもので、把握された 2 つの世界の差異がより大きなものとなっている。例としては、写真を見ながら発話される (20a) や、(20b) の 2 文目といった表現が挙げられる。

(20) a. That's me in the middle of the top row. [上の列の真ん中が私です。]

b. In my next movie I play a double-agent. Both the CIA and the KGB are trying to kill me.

[今度の映画では、私は二重スパイを演じています。CIA と KGB の両方が私を狙っているんです。]

こちらの方の手続きも図 5 (b) のように描いてみると先程のものとよく似ているが、概念的にはかなり異なるものである。ここでは話し手 (G) が実際の視座に留まっており、転移は生じていない。しかし話し手は同時に、写真や映画や夢の内に描かれた別「世界」を捉えてもいる。この別世界に現れる何らかの対象 G' は、現実世界における G と一致するものとして結び付けられ、その同一性に基づいて G' が通常は G を指示するのと同じ言語表現で描写されることになる。先程とラベルは同じだが、ここでの G' は外部の視座から観察される対象となっている。G' がほとんど文字通りの意味で**ステージ上** (on stage) に置かれていることは極めて明白であり、G は最適視点配置の場合とほぼ同様の仕方で、ステージ外から G' を観察していると考えられる。

ここまでの議論から、転移と貫世界同一性は異なる認知メカニズムを用いてはいるが、観察者 (G や G') の主観性とプロファイルされた対象の客観性という点では、どちらも図 4 (b) と同じ配置になると言える。いずれの事例でも観察者はプロファイルされた対象をステ

ージ外から知覚しており、両者は一致する対象でありながら、観察者と観察対象という大きな非対称性を持つのである。2つの構造で用いられる人称表現に差があるのはどうしてだろうか。転移の場合には、グラウンド要素を指示する際に、通常の一人称代名詞ではなく、三人称表現が用いられる。この手続きの要点はグラウンド要素を客観化することにある。つまり、デフォルトでは観察者自身であるような対象に対し、外部の視座からの眺めを貼り付けていると考えられるのである。三人称表現を用いることは、〈自己〉を〈他者〉のように扱いたいという欲求と整合的であり、視点移動を明示するために必要な手続きでもあると言える。それに対し、貫世界同一性は観察者をデフォルトでは大きく異なる別世界の対象と結びつける働きを持つ。つまり、この構造を用いることで、観察者である〈自己〉との区別をぼやけさせ、〈他者〉の客観性を低減させることができるのである。ここで見られる、一人称表現の非典型的使用はこの特別な把握を示す格好の手段と言えるだろう。

ここまで検討してきた例は、ほぼ全てモノを指示する表現であった。[\[130\]](#) ここからは、把握された対象同士の結びつきをプロファイルする関係表現を見ていこう。関係表現がプロファイルする関係には多くの要素が関わるため、直示や主観性との関係も複雑なものとなる。そもそも関係に参加する対象が、この点に関して様々である（たとえば、一方の参加者がグラウンド要素であり、もう一方はそうではないということがある）。それだけでなく、関係それ自体がグラウンド要素として機能するような可能性も考慮しなければならない。

このような可能性を検討するためには、Gの内部構造を明確化する必要がある。これはたとえば、図6(a)のように表すことができるだろう。ここでのグラウンドは、話し手(S)と聞き手(H)を主な参加者とする関係（具体的には、発話事象という過程）を中心としたものである。さらにここには、発話事象に生起する（音韻・意味の両方を含む）言語的内容という抽象的参加者(C)が存在すると考えられる<sup>16</sup>。ここでの主な関心事は表現の意味内容であるため、Cは話し手・聞き手による概念化のことだと考えて良いだろう。さらにこの概念化は描写の範囲と同一であり、Cと発話事象を繋ぐ縦線は把握関係を表していると見ることができる。これを踏まえ、図6(a)の表記上のバリエーションとして図6(b)を使うと便利だろう。図6(b)は描写の範囲がGの本体から切り出されて上部に配置されており、ここまで見てきた図(cf. とりわけ図4(a))とかなりよく似た形式になっている。主な違いは、図6では概念化が発話事象の一部であることを明示している点である。

---

<sup>16</sup> この表記法はかなり大雑把なものではあるが、ここでの目的には十分だと考えたい。より詳細に図示するなら、発話事象は静的関係ではなく過程であることや、その過程は時間上の位置や持続時間が存在することなどが描き込まれることになるだろう。ここで重要なのは、言語表現の「内容」という簡単な（そして広く流通している）用語を使っているからといって、人の言語観に染み付いている「導管」や「容器」のメタファーを是認しているわけではないという点である。

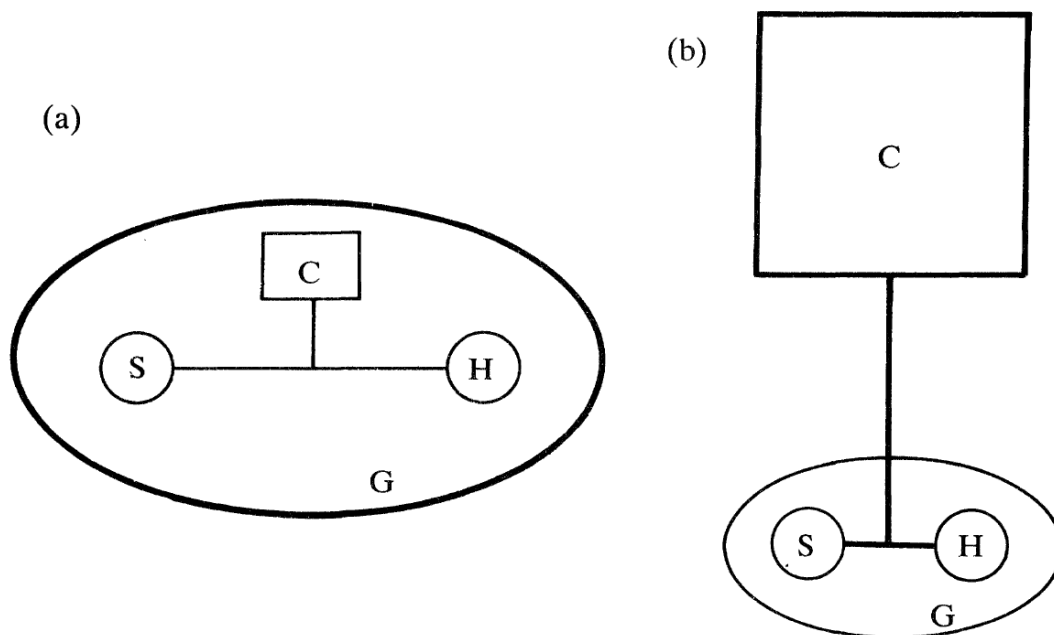


Figure 6

[131] 問題となっているのは、グラウンド (G) の一部が概念化対象として描写の範囲 (C) に含まれる〈自己〉指示であった。すでに見たように (話し手・聞き手、発話が生じる時点・場所といった) 主要なグラウンド要素は次の 2 つの仕方で描写の範囲に現れることができる。ステージ上の対象としてプロフィールを受けるか、客観的事態には組み込まれず、プロフィール外の参照点となるかである。もう一つ検討しなければならないグラウンド要素が残っている。発話という過程それ自体である。

発話という過程が他のグラウンド要素と同様に扱えるのであれば、図 4 に挙げた 3 つの G のいずれの位置にも現れることができるはずである。すなわち、描写の範囲外、描写の範囲内かつ客観的事態外、客観的事態内のプロフィールとしてステージ上に置かれる場合の 3 つである。ここから、それぞれ図 4(a)–(c) に対応する、図 7 に示した配置が成立するという予測が立てられる。図 7 は図 4 に以下の 2 つの操作を加えるだけで得られるものである。(i) 図 6 (b) で導入した表記法を採用する。(ii) プロファイルをモノから過程に変える<sup>17</sup>。

<sup>17</sup> ここで扱っているのはある種の〈自己〉指示であるため、図 7 (b)・(c) においてグラウンドが描写の範囲 (C) に含まれているにも関わらず、C そのものがグラウンド要素と同一であるという事実は頭を悩ますような問題ではない。また、図には平面上に描くことに由来する非本質的制約があり、そのせいで実態を上手く捉えられている面もあるが、あまり拘らない方が良さだろう。

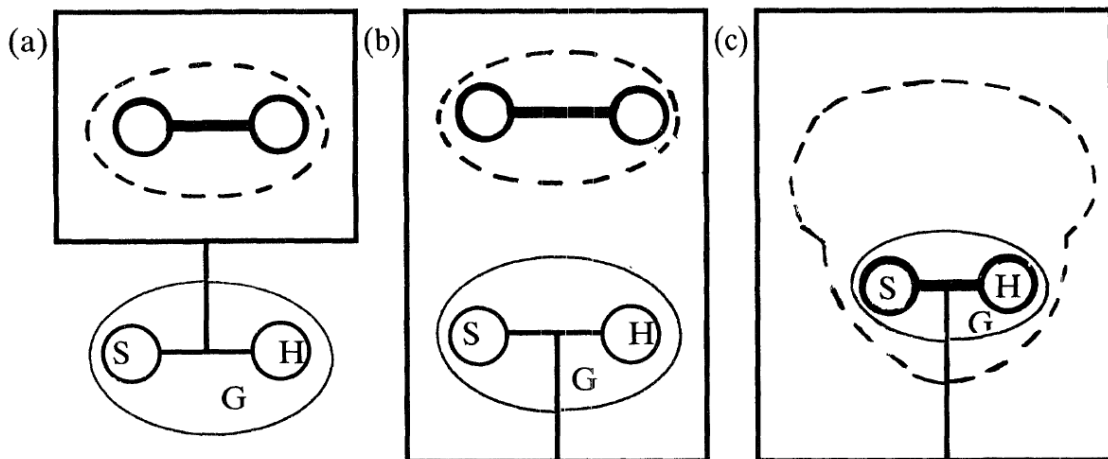


Figure 7

図7に示した配置が実際にありうるかどうかを明らかにするため、まずは図7(c)を取り上げ、文や定型節がプロファイルする過程として、発話事象自体がステージ上に登る可能性を検討する。このようなことはもちろん可能である。これは (21) に示すような、明示的遂行発話の定義的特徴と言えるだろう。

(21) a. I say to you that this wasteful government spending must stop!

[私はあなたに、このような政府の無駄遣いはやめるべきだと言っています。]

b. I ask you why he would ever do such a thing?

[私はあなたに、彼はなぜそのようなことをするのかと聞いています。]

c. I order you to pack your bags and leave town immediately!

[私はあなたに、すぐに荷物をまとめて町から出ていくように命じる。]

d. I promise you that everything will turn out all right.

[私はあなたに、全て上手くいくことを保証します。] [132]

明示的遂行発話を行うためには自己中心視点配置をとり、ステージ上の領域を最適な範囲よりも拡大させ、観察者とその周囲の状況を取り込む必要がある。この場合には、周囲の状況はグラウンドと一致し、特に注意が向けられる関係、すなわち客観的自体のなかで焦点となる領域は発話事象それ自体になると考えられる。このような視点配置では、I と you が話し手と聞き手をそれぞれ指示するのとまさに同じように、これらの文の主節述語が指示し、特徴づけている過程は、話し手が聞き手に向かって発言する事象を構成し、話し手・聞き手の役割を規定するものなのである。

このように明示的遂行発話文では、主節がプロファイルする過程は発話事象を構成する過程と一致することになる。言語行為はステージ上の注意の的となることで、グラウンド要素としての位置づけと両立するかたちで、最大限客観的に捉えられるようになる（このこと



との類像的相関により音韻の方も客観化し、具体的な現れを持つことになる)。とはいえ、文ないし定型節がプロファイルする過程は通常、話し手・聞き手のやり取りとは別のことである。言語行為の性質が表現の形式から明らかな場合であっても、発話事象自体は遂行発話節によってはっきりと指示されるわけではないため、(相対的に)非客観的である。その際、発話事象はステージ外に置かれ、客観的事態の一部ではないことを認めるとしても、図 7(a) と図 7(b) のいずれの位置に収まるのかははっきりさせる必要があるだろう。要するに、遂行発話ではないごく普通の文において、発話事象が描写の範囲に含まれているかどうかを明らかにしなければならないということである。

ここまでは議論を文に限定してきたが、発話事象自体もまた表現の意味の一部であり、描写の範囲に含まれると考えて良いだろう。たとえば、(22) に挙げた文には、それぞれの言語行為の性質に由来する意味の違いがあるのであり、その側面を意味記述から取り除く合理的理由は存在しないように思われる。

(22) a. You will leave town immediately, [statement]

[あなたはすぐに町から出ていきます。(陳述)]

b. Will you leave town immediately? [question]

[あなたはすぐに町から出ていきますか？(質問)]

c. Leave town immediately! [command] [すぐに町から出ていけ。(命令)]

これらの文の意味を、単に聞き手が発話時の直後に町を出ていくということのみに留めると、3 つとも同じ意味だということになってしまう。把握された事象が話し手の知識や希望との関係でどのように位置づけられるかも決定的に重要なのである。つまり、話し手が陳述によって聞き手に対して事象描写を提示しているのか、同意を求めているのか、事象を遂行するように指示しているのかといったことである。[133] それゆえ(実際に言葉を口にする行為だけでなく、話し手・聞き手の知識や目的をも含む広い意味での)発話事象もまた、これらの表現によって記号化される概念において高い際立ちを持つことになる。発話事象は、やり取りが生じる状況(という抽象的ドメイン)を規定し、指示された過程(すなわち、聞き手が町を出ていくこと)を位置づける働きを持つことから、他の例において既に見たようなステージ外の参照点と同様の働きを持つと言える。

このように、文の意味を構成する概念化全体の内には、発話事象の物理的、心的、社会的側面が組み込まれている。文が〈自己〉指示的であり、言語行為自体をプロファイルする場合には、この行為が客観的事態の中で注目を受ける部分となり、図 7(c) のようにステージに上がることになる。しかし典型的には、発話事象は指示される過程とは別ものであり、描写の範囲には含まれるものの、図 7(b) のようにステージ外に留まることになる<sup>18</sup>。認知的

---

<sup>18</sup> 認知文法における基本方針に従い、この分析では独立の理由で想定する必要のある構造

意味論の立場からは、文の意味に発話事象が含まれるという主張は妥当なものであり、全く驚くには値しない。実際、発語内の力（すなわち、当のやり取りがどのようなタイプのコミュニケーションか示すこと）は文が持つ特徴を見分ける際の基準としてかなり有効なのである。

言語的慣習により、文が持つ形式的特徴がそれと結びついた遂行的意味をもたらすことはあるが、この記号関係はあくまで文全体のレベルで生じるものであり、要素レベルの問題ではないように思われる。たとえば（語幹として見た場合の）動詞 *leave* が指示する過程は、話し手・聞き手への参照を含まずに概念化されるものである。つまり、（語源を論じる場合のように）この動詞に言及するだけであれば、図 7(a) のように発話事象は描写の範囲外に留まるということである。命令文 *Leave!* では、グラウンドを描写の範囲へと組み込み、元となる過程概念を特定の対人行為概念へと埋め込むために、意味がより包括的で複雑になる。定型節は（認識表現として）直示要素を必ず含み、グラウンドを参照することになるとはいえ、それ自体が遂行的意味を持つわけではない。

ここからは、発話事象を表すという特徴が当てはまらないにも関わらず、グラウンド要素が関係の参与者になる表現を検討する。主題の 1 つは、*There is confusion all around me* [私の周囲は騒然としている] と *There is confusion all around* [周囲は騒然としている] のような、グラウンド要素が明示されている場合とされていない場合に見られる相違である。[\[134\]](#) さらに、（現実性や同定などに関わる）抽象的ドメインと、（時間や空間のような）より基本的なドメインの両方の点で、グラウンドとの関係によって対象を位置づける認識表現についても再び論じる。

*all around* のような関係表現は（*There were presents all around the tree* [木の周囲にプレゼントがたくさんあった] という表現から分かるように）それ自体としては直示的ではなく、非直示的に用いた際には、図 7(a) にあるように関係的プロファイル全体が最適視点配置において規定される客観的事態の内部に収まることになる。しかし、参与者の 1 つがグラウンド要素と一致する場合、もはやこのような把握は不可能である。その場合には当のグラウンド要素 (G) が関係的プロファイルの一部となっており、少なくともその部分は、図 8(a) のように自己中心視点配置によって拡張された客観的事態に組み込まれ、ステージ上に登ることになる。この構造は、当のグラウンド要素が明示されるかどうかという点を捨象してはいるが、この種の表現が直示的に用いられた際の意味を表す、ひとまずのたたき台となる。グラウンド要素を明示しないことが意味に与える影響については、すぐ後で検討する。とはい

---

しか用いていない。ここでの議論は少なくともこの意味で、Ross (1970) が以前の遂行節分析への代案として考案した考えに原理的説明を与えるものとなっている（Ross は語用論分析 (pragmatic analysis) と呼んでいるが、認知文法では意味論と語用論が区別できるとは考えていない）。話し手・聞き手は「宙に浮いている」のではなく、ただステージ外にいるだけである。

えまずは、Gを含む関係と典型的視点配置の関わりを掘り下げてみよう。

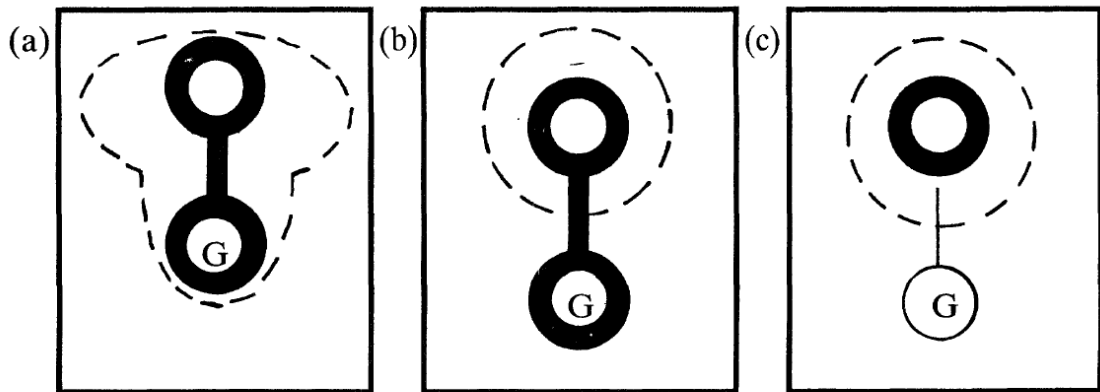


Figure 8

まずは図 8 (a) の配置から始めるのが良さそうである。図 8 (a) の自己中心視点配置から最適視点配置への移行が生じるとしよう。同様の構造に対するここまでの特徴づけを踏まえると、この移行は以下に述べる理由で 8 (c) の配置へと至ると考えられる。最適視点配置での客観的事態とは観察可能性が最大になる範囲のことなので、G は当然その外に置かれる。[\[135\]](#) この視点配置へと移行することで、図 8 (b) の構造が得られる。しかしながら、この配置は認知文法において実現不可能である。客観的事態は観察において注意が向かう領域であるため、表現のプロファイルはこの範囲に収まっている必要がある。つまり指示対象とは、関心の中心を占め、客観的事態において焦点領域となるものなのである。そのため、転移に頼らない限りは、関係の要素がグラウンド要素を主要な参与者としてはっきりプロファイルしつつ、同時に当の関係を客観的に観察するためにグラウンド要素がステージ外に留まることはありえないのである。このように、図 8 (b) の構造はこの記述枠組みそのものの制限によって排除されるため、G を客観的事態から外した場合には自動的に図 8 (c) が生じることになるのである。G も（関係は参与者と独立に成立するものではないため）G を含む関係も、もはやプロファイルの内部には存在し得ない。客観的事態の内に完全に包摂され、プロファイルされた対象であり続けるのは、G 以外の参与者のみである。G および関係の全体はそれでもこの表現の意味の一部ではあるが、ベースの一部としてプロファイルを受けずにステージ外に置かれることになる。

図 8 (c) の配置を苦労して導入したのはもちろん、単なる知的トレーニングではない。実のところ、これは認識表現を表すのに必要な構造なのである<sup>19</sup>。this のような指示詞は、(非

<sup>19</sup> この構造は認識表現のみに当てはまるわけではない。たとえば、直示義の Tuesday (図 2 (b)) もまたこの規定に合致する。認識的とされる表現は主に現実性や同定などの「認識的」ドメインにかんするものに限定されている。

常に大雑把には)関係表現である *near me* と *identified to us* を合わせたものに相当するため、グラウンド要素を参与者とする静的関係を指示しているように思われるかもしれない。認知文法においては、*near me* と *identified to us* については実際に関係をプロファイルし、図 8 (a) に示した自己中心視点配置を求める表現として分析する。それに対し指示詞 *this* は、ほぼ同様の関係概念を含んでいるが、図 8 (c) の最適視点配置を要求する。したがって、*this* モノを、具体的には話し手・聞き手が同定可能であり、かつ話し手の近傍領域に位置するモノをプロファイルすることになる。話し手・聞き手は参照点としてステージ外に留まり、近接性と同定という関係は表現の意味にとって重要な要素でありながら、プロファイルされることはない。同じように、過去時制形態素は、過程の位置づけが発話時よりも前の時点であることを指定する点で直示義の *before* と類似している。*before* は図 8 (a) に当てはまり、静的関係を表すのに対し、過去時制の意味は認知的である。すなわち、過去時制は図 8 (c) の構造を取り、G も G に対する時間的先行関係もステージ外に置かれ、プロファイルを受けないということである(もっとも、過去時制がプロファイルするのはモノではなく関係である)。

この分析には強い必然性がある。まず、このように考えることで認識表現と *identified* や *before* のような非認識表現との意味の違いを自然な仕方で説明できる。[\[136\]](#) さらに重要な点は 2 節で見た認識表現が持つ特殊な性質を解明するのに役立つことである。以下では主に指示詞を取り上げ、この性質を簡単に検討したい。

指示詞が節の述語になれないのは、以下で見るように本来的に名詞句であり、関係的でなければならないという要件を満たせないからである。認識表現にとって重要な特徴は、(意味内容の重要な部分を形成しているとはいえ)グラウンドする関係それ自体ではなく、認知的にグラウンドされた対象のみをプロファイルするということである。すなわち、指示詞が指示するのは図 8 (c) にあるように、スキーマ的に指定されたモノであり、動詞の方の認識表現である時制や様相が指示するのはスキーマ的に指定された過程だと言える。指示詞はモノをプロファイルし、さらにその認知的地位を指定する要素であるため、認知文法においてはスキーマ的な名詞句として分類されることになるのである。このように分析することで、英語など多くの言語で指示詞が(しばしば照応表現として)単独で名詞句として振る舞うことができるという特徴にも説明が与えられる。英語の法助動詞が持つ、(Yes, you may, She will, We must のように)定型節の動詞要素として現れることができるという特徴についても同じように、スキーマ的ではあるが認知的にグラウンドされた過程を指示すると考えることで説明できる。

この分析にはさらに、認識表現が認知文法における結合価関係の扱いに対して提起しているように思われた問題についても労せず解答を与えられるという利点があるように思われる。様々な観点を考慮すると、認識表現は名詞や動詞との結合価関係に参与する場合、常にプロファイル決定詞になると考えるのが望ましいように思われる。認識表現は(*identified*, *near*, *certain*, *before* のような)静的関係を表すとするならば、このような考え



は維持しがたいことになるだろう。たとえば、this man は man とグラウンドとの空間的・認識的關係を指示する形容詞であることになり、He fainted は faint の発話時に対する時間的先行關係を指示する副詞であることになってしまう。このような直示關係が表現の意味に貢献していることは否定し難いとはいえ、this man は当の男性を指示する名詞句であり、He fainted は気絶という過程を指示する過程的要素だとしか考えられないだろう。認識表現の構造は図 8(c) である、つまり、プロファイルはあくまで（モノないし過程である）対象自体であり、グラウンドとの關係についてはプロファイルを受けない部分としてベースに残されると見なすことで、まさにそのように分析できるようになるのである。指示詞はスキーマ的なモノを指示し、それが結合価關係によって結びつく名詞のプロファイルと一致すると考えられ、過去時制形態素はスキーマ的過程を指示し、それが動詞のプロファイルと一致すると考えられる。[\[137\]](#) このようにして、認識表現がプロファイル決定詞であっても、合成構造 this man は男性を、He fainted は過程を指示するという正しい結果が得られるのである。

認識表現の内容は（時間、現実性、同定という）認識ドメインに概ね限られているが、これらのドメインを参照する表現が他には存在しないとは言い難い。類似するように思われる他の要素とのはっきりした違いは、簡単に言えば「認識表現は直示的であるためグラウンドが最大限主観的に把握される」という点にある。グラウンドは、直示表現では必ず描写の範囲内に置かれるため、図 4(a) のように完全に主観的になることはない。とはいえ、描写の範囲に含まれる要素の間にも主観性の差はあり、これがまさに図 8(a) と 8(c) の違いの基盤となっている。図 8(a) では自己中心視点配置が要請され、主観と客観の違いを生み出す観察の非対称性は大部分取り払われている。G はステージ上に登っているため、（もはやこのような概念を用いるのは適切ではないかもしれないが、）元々の主観性が最小化し、客観性が最大化しているということである。それに対し認識表現では最適視点配置が保たれているため、観察者と観察対象には一定の非対称性が残っている。図 8(c) では G が（観察において注意が向けられる領域である）客観的事態の外に置かれ、観察者としての役割が観察対象としての役割より遥かに優位であるため、当の状況において最大限主観的に捉えられていると言えるだろう。

このような認識表現の特徴付けは、結合価關係によってランドマーク（すなわち、参照点）を精緻化することができないという別の特徴とも整合的である。near や identified のランドマークは（a town near us や a person identified to us のように）グラウンド要素であっても關係なく結合価關係を用いて明示できるが、指示詞ではこれに直接相当する表現は不可能である（\*this (to) me town、\*(a/the) town this (to) us）。これはもちろん、認識表現は直示的でなければならないという制約によって、有意味な比較の可能性が排除されていることの反映でもある。一方でまた、この現象は主観性スケールが持つと考えられる類像性とも結びついている。上で見たように、音韻の客観化（つまり、明示的に述べること）と、概念の客観化は相関する傾向があると考えられる。具体的には、グラウンド要素は明示される場合よりも、



されない場合のほうが（より）主観的に捉えられやすいということである。認識表現では G への参照を明示してはならないという事実は、直示表現は G の主観性を最大化するという特徴付けと見事に合致している。

残りの課題は、客観性と明示的言及との類像性という仮説をより詳しく検討することである。<sup>[138]</sup> 以下では、とくに図 8 (a) で示した配置を表す表現、すなわち、グラウンド要素を参与者の 1 つとする関係表現を集中的に扱う。具体的には以下に挙げる文 a と b の違いを考えたい。ここでは、a と b がどちらも同じグラウンド要素を含むものと解釈される。

- (23) a. I hope not. [私はそうじゃないと良いと思う。]  
b. Hope not. [そうじゃないと良いと思う。]
- (24) a. You leave me alone! [あなたは私のことを放っておいて。]  
b. Leave me alone! [私のことを放っておいて。]
- (25) a. There is snow all around me. [私の周囲は雪だらけだ。]  
b. There is snow all around. [周囲は雪だらけだ。]

仮説が正しければ、それぞれの例で問題となるグラウンド要素は、b よりも a の方が客観的に捉えられる傾向があることになる。

文 a と b の意味の違いは、もちろん非常に捉えがたいものである。(23) と (24) では、フォーマルさが関係しているように感じられる。(23a) の文がどのような場でも適切であるのに対し、主語を省いた (23b) は気軽な場での発言に限られる。自身の主語としての役割を明示せず済ませることで、話し手は聞き手の共感を誘引し、自身の内的な視座から当該の過程を観察してもらいやすくなる。それに対し、(23a) のように〈自己〉を明示した場合には、話し手自身を他の人々とおおよそ同じ立場に置いていることになる。自分自身の態度を〈他者〉の態度を描写するのとおおよそ同じ仕方で、より客観的に描写しているのである<sup>20</sup>。同様に (24a) では you を明示することで、命令が聞き手に向けられたものであることを（契約書の場合のように）明示的・客観的に示す効果がある。(24b) の話し手は、協力的な聞き手が同じ結論へと（英語の言語的慣習を利用して）間接的にたどり着くことを期待しているが、(24a) では「言葉を濁さず」に明言している。

フォーマルさと客観性の相関を見て取るのは容易い。場がフォーマルになるほど、当然のこととして済ませられる事柄は少なくなる。これはつまり、状況のうちの多くの要素に変更や調整の可能性が見込まれ、検討対象として取り立てる必要が生じるということである。あ

---

<sup>20</sup> 主語の省略には奥ゆかしさを醸し出す効果もあるかもしれない。話し手が舞台上に登るのを嫌がっているというわけである。転移の場合と同様に、同じ手続きであっても（つまり、主観性スケール上の位置という点では同じ効果を持っている）、その背後にある聞き手との関係や感情の問題は様々であるように思われる。

る対象が客観的だと言えるのは、このような仕方でステージ上に置かれ、観察対象として注意を向けられる場合である。このことは、グラウンド要素であっても変わらない。そのため、フォーマル度の低い表現が持つグラウンド要素を明示しないという特徴は、明示する場合と比べて、その要素をより主観的に捉えていることの現れだと解釈してよいだろう。[139]

(23)・(24) の例は、ここでの基本的仮説と矛盾しないように思われるが、関わっている概念が捉えがたいものであるために、根拠としての説得力はごく弱いものに留まっている。(25) のような事例であれば、狭義の観察、すなわち知覚経験に基づく解釈がすぐに思いつくため、証拠としてより強力かもしれない。(25a) か (25b) かの選択は、話し手が描写の基礎となる知覚を目立たせようとする程度によるものだと考えられる。(25a) の話し手は単に周囲の物理的環境を切り取って描写しているだけだが、(26b) の話し手は実際の見えを描写しているということである。たとえば、ある宇宙飛行士が別の惑星に降り立ち、宇宙船の周囲を探索しはじめたところだとしよう。ヒューストンと無線を繋ぎ、宇宙飛行士が普段訓練されているように務めて感情を交えず落ち着いた声で、地球にいる科学者たちに環境にかんする特徴を次のように項目ごとに客観的に伝えていく。

(26) I am in the middle of a large crater. It is approximately a kilometer in diameter. *There is snow all around me*, to a depth of about 10 centimeters. There is a thin crust of ice on the upper surface of the snow, except in the vicinity of the larger boulders.

[私はいま大きなクレーターの中央に立っています。クレーターの直径は約 1km です。私の周囲は雪が降り積もっており、深さはだいたい 10 センチメートルです。巨礫の周囲を除き、雪の表面には氷が薄く張っています。]

それに対し今度は、宇宙飛行士ではない人が休暇を取って山でスキーをしているとしよう。丘の上に腰掛け、地元の友人に絵葉書を書こうと思いついたところである。

(27) What a glorious day! The sun is shining, the sky is blue, and the scenery is spectacular. *There's snow all around*, as far I can see, and no smog at all. I feel great! Wish you were here.

[今日はなんて良い日なんだ。太陽は輝き、空は青く、景色は壮観だ。見渡す限り一面の雪で、空気は澄み渡っている。最高だ。君がいないのが残念だよ。]

問題の表現について、他方の文章のものと入れ替えられないとまでは言えないだろう。たとえば、(28) は容認可能な文である。

(28) *There's snow all around me, as far as I can see.* [私の周囲は見渡す限り一面の雪だ。]

しかしながらやはり、元の環境での使用のほうが自然であり、別の文脈に置き換えると有標

の選択肢になるとは言えるだろう。

そのため、この差異は予想できたように些細であり、他の要因によって簡単にかき消されてしまうものである。しかし状況さえ整えば、グラウンド要素を明示せずにおくことには、事態がその要素の視座から概念化されたという把握を選びやすくする効果がある。(25a) も事態を「話し手の目を通して」観察されたものとして概念化することを妨げる要素を含んでいるわけではないとはいえ、(25b) の方ははっきりとこの解釈を促しているという違いがあるのである。[140] これに関して注目すべきは、どちらの文も視覚や観察地点にかんする語彙項目をまったく含んでおらず、さらに、話し手の立場を取りやすい後者の文では、話し手が言及されてすらいけないという点である。ここでの分析は、この事実も簡単に説明できる。話し手を明示せずに参照することで、より主観的に捉えられるようになり、そしてその主観性とは、観察者と観察対象の非対称性がある程度保っている観察事象において観察者が持つ性質なのである。(25b) のような文が視座や知覚との結びつきで理解されやすいのは、主観性というものの本質の現れと言えるだろう。

表現上の技法として、三人称表現であっても明示せずに参照することで主観化効果を生み出す場合がある。(29) を見てほしい。

(29) Dmitri was trudging through the woods. [ドミートリは森の中をとぼとぼ歩いていた。]

a. There was a clearing ahead of him. [彼の前方に開けた場所があった。]

b. There was a clearing ahead. [前方に開けた場所があった。]

(29) が小説の冒頭だとして a ではなく b を続けることにした場合、どのような効果があるだろうか。著者が b を選ぶことで、ドミートリの視点からの語りを採用し、ドミートリの目を通じて状況を描き出していることは明らかであろう。それに対し、a を続ける場合には様々な意図がありうる。たとえば、著者および読者の視点をドミートリの視点と統合する概念的転移を避けることで登場人物との距離を保ち、外部（つまり、ステージ外）の視点から事態をどこまでも客観的に把握しようとしたのかもしれない。このような解釈の根拠として、(29b) ではドミートリが前方に開けた場所があることを（目にしている、あるいは、その森に詳しいといった理由で）分かっており、そこに向かっているという読みがかなり優勢になるのに対し、(29a) ではドミートリが前方の様子を知らないという解釈も同程度に自然である（その場にかんする情報は全知の著者や外部の視座からもたらされたことになる）ことが挙げられる。

もう一つ別の種類の例も見ておこう。ある訪問者が UCSD 言語学科の会議に同席することを許可されたとする。会議室に着席し、周囲の有名人たちに身を縮ませながら、隣の席の人に (30) のように囁く。

(30) What a thrill to be in such illustrious company!

[こんなすごい人たちと一緒にいられるなんて感激だ。]

a. Ed Klima is sitting across the table from Dave Perlmutter!

[エド・クリマがデイヴィッド・パールムッターの向かいに座っているよ。]

b. Ed Klima is sitting across the table from me!

[エド・クリマが私の向かいに座っているよ。]

c. Ed Klima is sitting across the table!

[エド・クリマが向かいに座ってるよ。] [141]

(30a) が少なくとも位置関係については完全に客観的であるのに対し、(30b-c) は直示的であり、話し手が参照点になっている。(30b) よりも (30c) の方が、話し手が主観的に捉えられており、さらにいえば (30c) は状況を話し手の「目を通して」描き出していると考えられる。このような考えは一体どのようにして正当化できるだろうか。また、ここで述べた意味の違いについてもさらなる明確化が必要である。ここまでで検討してきた道具立てや表記法によって適切に特徴づけることができるだろうか。

(30b) と (30c) の違いを正当化するために、シナリオの続きを考えてみよう。この歴史的な学部会議の記録を後世へと伝えるために、写真家も何人か入室を許されていたとする。翌日、例の訪問者が、地方紙の 1 面に会議の様子を伝える何枚かの写真が大きく掲載されているのを見つける。その感動を伝えようと急いで友人のところに向かい、写真を指さして興奮した様子で言う、……何をだろう。(31a) であればこの状況でまったく自然であるが、(31b) ははっきり奇妙であるように思われる。

(31) Look at this photograph! [この写真を見てくれ。]

a. Ed Klima is sitting across the table from me!

[エド・クリマが私の向かいに座っているよ。]

b. \*Ed Klima is sitting across the table!

[エド・クリマが向かいに座ってるよ。]

この容認性の違いは、ここでの分析から直接に説明できる。この状況は図 5(b) に示した貫世界同一性を含むものである。話し手は写真を見ており、その写真に描かれた事物は全て、現実の視座の外側にある客観的な対象である。話し手は指さした人物を写真世界で自分に対応すると考えており、それが指示表現として *me* が使われる理由になっているが、写真の中の人物はあくまでステージ外から客観的に観察される対象である。これは *me* の典型的使用 (cf. 図 4 (c)) ではないが、少なくとも話し手自身を (可能な範囲で) 観察対象として把握しているという点は共通している。一方で、*me* を用いない (31b) は話し手が主観的に把握されていることを示している。話し手の観察者としての役割が、観察対象としての役割よりも重要だということである。

以上を踏まえ、この 2 つの表現における話し手の位置づけをさらに明確にする必要があ

るだろう。ここでは話し手が明示的に言及されない場合であっても、参照点として機能しているため、G はどちらの場合でも必ず描写の範囲に収まっていることになる。さらにこの種の表現は、直示的ではあるが非認識的である。[142] たとえば、(30) の *across the table (from X)* は参照点 X が会話参加者と一致する場合であっても、関係的プロファイルのままである。さらに、この表現の直示性は義務的ではないし (cf. *across the table from Dave Perlmutter*)、直示的である場合であっても (*across the table from me* のように) 参照点を結合価関係において明示することが可能である。このように様々な特徴がある中で、この表現の違いは認識表現の性質において現れる。このことから、認識表現の意味を表す図 8 (c) は、ここで検討している類の構造を扱うには不適切であると考えられる。

既に述べたように、(指示詞など) 認識表現では G がステージ外に留まっており、表現のプロファイルは客観的事態の内部に制限されるため、グラウンドに対する位置づけがプロファイルされることはありえない。一方で、ここで検討しているのはグラウンド要素を主要な参与者としつつも関係的であるような表現である。したがって、(同じ解釈が得られる場合には) *across the table from me* でも *across the table* でも変わらず、話し手が客観的事態内であるステージ上に登っていると考えられることになる。つまりどちらも、自己中心視点配置によって客観的事態が拡張され、G がプロファイルされた関係の参与者としてその中に収まる図 8 (a) に相当することになる。図 8 (a) については導入の際に予め断ってあるとおり「ひとまずのたたき台」である。ここまでくれば、たたき台であるにしても更に良いものへと改定する必要があることは明らかであろう。ここで見ている 2 つの表現には、主観性と客観性の区別と関係する何らかの意味の違いがあると考えられるが、これまでに用意されてきた表記法ではこの違いを明らかにすることができないのである。

ここまで見て来た例について、話し手の参照点としての役割が明示されない場合には、関係が「話し手の目を通して」把握されたものとなると考えたことが、問題解決の手がかりにならないだろうか。この分析が正しいとするなら、話し手に明示的に言及することでこの解釈が抑制され、概念化主体は事態を把握する視座の選択について一定の自由を得ることになるはずである。ここから、話し手による〈自己〉言及は、実際の立ち位置と言語表現のために仮設する視座に、ある程度の分離が存在することの指標として働きうると考えられる。これはつまり転移が起こることなのだが、この転移は図 (5) に図示した、*the person uttering this sentence* という表現で話し手自身に言及する事例に見られる類の根本的なものではない。根本的転移ではステージ外に視座を仮設し、その結果として人称が変わることになるが、*across the table from me* であっても *all around me* であっても、そのような手続きが必ず求められるわけではないのである。[143]



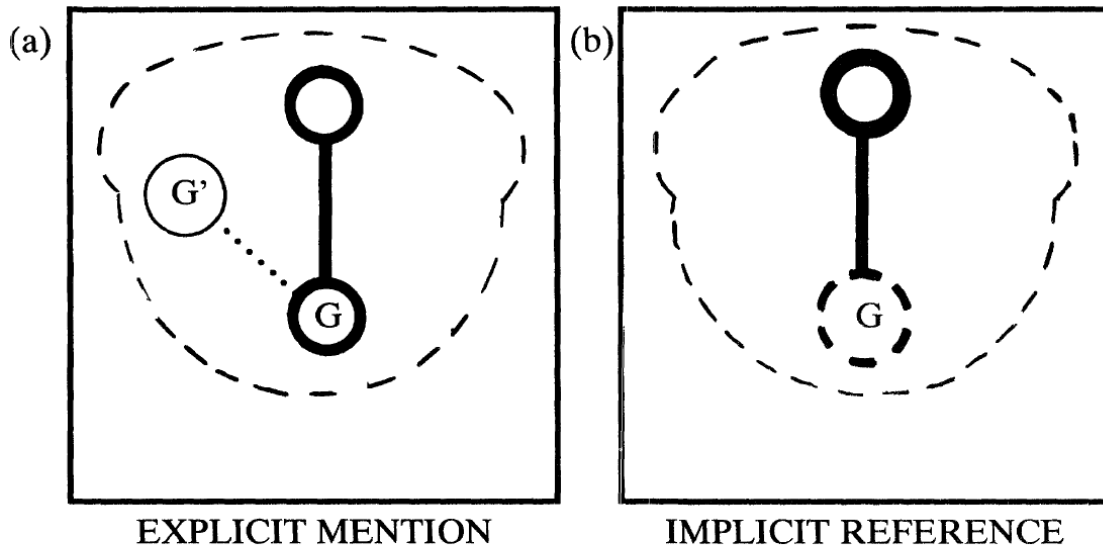


Figure 9

代案として図9 (a) に示すような、より控えめな転移を提案したい。これまでと同様、G は話し手の実際の立ち位置であり、G'は表現のために話し手が仮設する視座である。話し手は自身が参与する関係を描写する際、自己中心視点配置を選択し、客観的事態内のステージに登ることになる。その際、根本的転移を行わずとも、実際の立ち位置からは十分に乖離した視座 G'を採用することで、元々の立ち位置からは不可能であった〈自己〉観察を行う特別な権利を得ることになる。直感的には、話し手は客観的事態にかんして自身が、ある意味で「全知」の位置にいると考えており、ステージ上のどの地点であっても自由に視座 G'として採用できるように感じられる（もっとも、一般的にはそのような心的移動はごく小さなものである）。話し手は「外部から」一定の〈自己〉観察を実行するのに十分なだけ、「自分自身の外へと踏み出している」というわけである。

このことの極限事例として、転移距離がゼロとなって G と G'が一致する場合がある。そのため、明示的〈自己〉言及は、話し手が実際の立ち位置から事態を把握することと矛盾しないばかりか、心的移動を必要としないということからすれば、デフォルトの選択ですらありうるのである。もちろん話し手を明示しないことで、義務的ではないにしてもかなりの程度、この解釈が促されると考えられる。そのようなわけで、図9 (b) は話し手の実際の立ち位置と仮設された視座にずれが存在しない配置を示している。ここには転移が存在しないため、話し手の主観性が強化され、それに伴って〈自己〉観察能力が減少している。[\[144\]](#) 図9 (b) では、このように話し手の観察対象としての際立ちが減少していることを、G の周囲を破線円にして表している。

まとめると、話し手の主観性については最低でも、転移がある場合に3つ、ない場合に2つで合計5パターンの程度があることになる。転移がない場合には、話し手は (i) 描写の範囲の外に置かれる、(ii) 描写の範囲内のステージ外に置かれる、(iii) 「話し手自身の目を通

して」描き出された客観的事態のステージ上に置かれる、のいずれかになる。話し手の主観性は (i) から (iii) に行くに従って減少し、同時に客観性は増加していく。ただし (iii) まで行くと、主観と客観を区別する基盤は非常に希薄なものとなる。それに対し、転移がある場合にはその基盤が保たれ、話し手の客観性は転移の程度に応じて増加していく。こちらには少なくとも2つの可能性がある。(iv) 仮設された視座が客観的事態の内部に留まる、(v) ステージ外に視座が仮設され、高度な客観性が成立する。

## 5. 理論的含意

現行の理論言語学の立場からは、本論文での分析はどうしようもなく曖昧で、定式化されていないものに見えることだろう。そのような批判を受ける危険性は否定できないが、ここで行っているような試行錯誤は、後により厳密な方法で分析されることになる現象の基本的性格を直感的に分かりやすい仕方でも明らかにするための予備的考察であり、それが価値を持ちうることは、そして必然的に価値を持つことすら、疑う余地はないように思われる。一貫した記述枠組みに位置づける最初の試みであるため、不十分な点があることは否めないが、意味構造や文法構造に認知的基盤が存在すると認める立場からは、この論文で取り組んだ問題が重要であることはまったく自明であろう。この枠組みに不満がある場合には、同程度の一貫性と詳細さを有し、かつそのような難点を持たない別の枠組みを提示することが望ましい。

ここでの分析はあくまでたたき台であるが、重要な点を様々に含んでいるように思われるため、最後にそのうちのいくつかを選択し、簡単に触れておきたい。認知文法の立場からは、この分析の主眼は認識表現を特徴づけること、より具体的には、その意味を掘り下げること、結合関係における原理的説明の例外となっていた変則的振る舞いに見通しの良い説明を与えることにある。認識表現の特殊性は他の直示表現とは異なり、極端に主観的であることに起因する。<sup>[145]</sup> 文法化の過程に関心を持つ、そしてとりわけ、その際に生じる意味の「希薄化」に関心のある言語学者は、関係する一つの側面として「主観化」にも同じように注意を向けるべきであろう。主観化が示す類像性はもちろん本書の主題とも深い関わりを持つものである。主観性は明らかに扱いが難しく、これまでほとんど無視されてきたが、このように見逃してはならない現象であることが示せたのではないかと思う。

主観と客観という概念は、文法にかんする伝統的問題を明確化する際にも多くの寄与をもたらすだろう。そのような例としてここでは、(32) に挙げるような補文主語の任意性とされてきた問題についてごく簡単に触れておきたい<sup>21</sup>。

---

<sup>21</sup> (32b) は Who do you want to be rich? 「誰がお金持ちになると良いと思う?」という質問への答えとして用いることができるし、その場合には (32a) よりも自然なものになるだろう。この場合には、me に対比強勢を乗せることができるが、通常 of 強勢で発話される状況を想定することも可能である。

(32) a. I want to be rich. [私はお金持ちになりたい。]

b. I want me to be rich. [私は私がお金持ちになれば良いと思う。]

want のような認識動詞の場合には主語が概念化主体となるため、話し手・聞き手が文全体を把握するうえで担うのとおおよそ同じ役割を、補文との関係で担っていることになる。ここから、(32b) のように me を明示することで、補文節が描写する過程における主節主語の役割がより客観的なものとして把握されていることが示されるとする展望が開けてくる。これは実際、正しい分析のように感じられる。補文節主語が明示されない (32a) の文は、話し手が感じる望みをそのまま描写しているのであり、他の人がお金持ちになる可能性は何にせよ考慮されていないのである。それに対し、(32b) はより理知的である。ここでは話し手がお金持ちになりうる人の候補を考え、欲求の対象となる人物として自分自身を選び出している。欲求の対象として意識されるという点で、〈自己〉が〈他者〉と同じように客観化されているのである。

主観性・客観性スケール上の表現の並びは、Givón の提案する**主題性** (topicality) と一定程度類似しているし、DeLancey (1981) が**共感度階層** (empathy hierarchy) と呼ぶ（他にも様々に名付けられてきた）ものとも様々な点で相関が見られる。この階層で上位に位置するのに効いてくる要因として、主題性、定性、個別性、有生性、人間性といったものがしばしば挙げられる。これらの要因は本論文で、知覚の最適性との関係で特徴づけた客観性とまったく無関係というわけではない。対象が客観的になるのは、背景および観察者から明確に切り離され、はっきりと細部まで知覚される場合なのである。様々な要因が関係しているため、妥当性を示すことは難しいが、以下ではこの点について簡単に述べておく。[146]

**近接性** (proximity) スケールと**客観性** (objectivity) スケールには密接な関係があるが、やはり区別は必要であろう。大部分が重なっているとはいえ、話し手・聞き手（すなわち観察者）との関係が異なっているのである。主題性や共感度に結びつく要因として挙げてきた要因は全て、対象をグラウンドの近くへと配置するものとして解釈することができる（もちろんその場合の距離は抽象的な意味で理解する必要がある）。たとえば定性は、特定個体への「接触」が既になされていることを意味するし、旧情報とは話題となる範囲へと既に持ち込まれている内容のことである。人間は他の有生物よりも上で、有生物はそれ以外よりも上だというのも、会話参加者との類似性に着目したものである。これはつまり、自己中心性や共感の点での近接性だと言えるだろう。個別性、境界の明瞭さ、記述の詳細さは全て、知覚における観察者への近接性と相関しており、同様の相関が（ここまで様々に見てきたように）認知過程のより抽象的な水準にも現れていると考えられる。

しかしながら、近接性は客観性と完全に重なるわけではない。このスケールが観察者との近さのみを基準にしているのであれば当然、観察者がスケールの極となる。近接性の最大値は観察者との接触や、場合によっては一致であろう。一方で、客観性には観察者との一定の

距離が必要である。知覚における最適性は大部分が近接性と相関しているが、ある境を越えると対象が観察者に近づけば近づくほど、知覚可能性が減少するようになる。つまり、観察者は客観性スケールの極ではないのである。実際のところ、観察者は最も主観的な対象である。したがって、客観性スケールは近接性スケールと非常によく似ているが、〈自己〉観察の困難さに起因する特異性を持つと言える。観察者への近接性が最大化するのは観察者自身の場合だと考えられるが、客観性が最大化するためには観察者から一定の距離が必要であり、つまりは〈他者〉でなければならないのである。

2つのスケールの内、どちらか一方が正しいというわけではない。それぞれに存在意義があるし、言語にとって重要であることも明らかである。たとえば、共感度・主題性スケールの重要性は節の主語位置への現れやすさとの相関から確かめることができる。ここでの最上位は話し手・聞き手である。それに対し、会話参加者の扱いが異なるスケールもまた妥当であることは、DeLancey が挙げる類のデータによって保証される。1人称形と2人称形は分裂能格性などで、他の形と異なる扱いを受けることが多いのである。1つの作業仮説として、ここでは客観性が重要な機能を果たしていると考えられないだろうか。[147]

最後に、本論文での分析を踏まえると、意味構造の記述はどのように捉え直されるかを考えてみたい。まず、把握関係や客観主観の非対称性は多くの表現や構造の特徴づけに不可欠であり、無視することのできない要素であるということになる。では、意味構造一般の形成形成にとって、はっきりと「知覚的」だと考えられるような要因はどの程度関わってくるのだろうか。ここでの分析が成功しているのであれば、主観性のような掴みどころがなく、ぼんやりしているように思える概念が実は、強固に動機づけられ概念的基盤を有するいくつもの具体的な道具立て用いて、厳密に記述できるようになるかもしれない。

最も根本的な問題について言えば、本論文の分析は意味や意味構造が本質的に心の働きに根ざしているという事実を完全に受け入れる必要があることを示している。意味とは概念化なのである。意味は把握関係に基づき、概念化主体が何らかの状況を構造化するために用いる捉え方として現れるものである。基本的な状況が同じであっても、複数の捉え方によって構造化することが可能であり、そのようなことが一文の中で同時に起こることも多い。人の把握能力こそが意味の源泉であり、意味を捉えようとする際にはまず、そこから始めなければならないのである。この能力は文法にとっても同様に重要である。なぜなら、文法とはまさに、概念内容を構造化し記号化する慣習的方法のことだからである。